



MAGNOLIA CAFE ANNUAL REPORT 2021

2021年度 マグノリア・カフェ
年間レポート「MARE」 第1集

MAGNOLIA CAFE ANNUAL REPORT 2021

2021 年度 マグノリア・カフェ

年間レポート「MARE」 第1集

四国学院大学

まえがき

マグノリア・カフェ運営委員長

ネルソン橋本 ジョシュア諒

2021 年は、四国学院大学にとって新たな一歩を踏み出す年となった。4 月からカリキュラム改革が本格的に始まり、70 周年記念事業として、マグノリア学寮、アトリウム・コイノスおよびカフェテリア・コイノスがオープンした。さらに、これらの教育改革とキャンパスにおける新たな試みを推進する主企画の一つとして、〈マグノリア・カフェ〉が設立された。2021 年度以前までは〈Postmodern Cafe〉(PM カフェ) の名称で展開していた活動を継承し〈マグノリア・カフェ〉として再出発したのである。

マグノリア・カフェは、近代社会あるいは現代社会への問いをテーマとし、学生と教員が共に学びを深めていく場である。課外活動として、講座、ゼミナール、ワークショップといったさまざまな学びの形態を用いて、知的作業に自由に取り組むことができる。

2021 年度は、10 のマグノリア・カフェが開催され、それぞれ異なるテーマ(問い)を持ち、活動を行うことできた。食を共にすること、空間の共有を重視することがマグノリア・カフェの重要な一面であるが、新型コロナウイルスの影響により、多くの活動に制限がかかってしまった。しかし、本レポート(Magnolia-cafe Annual REport = 「MARE」)が示すとおり、それぞれのカフェは、知的共同体の構築を止めることはなかった。ちなみに、MARE [マーレ] はイタリア語で「海」を意味する。「海」は、私たちにとって馴染み深い、穏やかな瀬戸内海のイメージである。「MARE」を通して、瀬戸内海の傍らで展開しているこれらささやかな活動を記録していきたい。

今年度は、普段の各カフェの活動に加えて、全カフェが協力して大学祭の中で「マグノリア・カフェ ストール」を行い、そして初年次教育の一環として「マグノリア・カフェ フォーラム」を開催することできた。

記念する「MARE」第1集は、マグノリア・カフェの多くの魅力を伝えている。また、さまざまな角度から現代社会に対する鋭い問いが投げかけられている。本レポートを手にとっていただいた皆さんには、マグノリア・カフェの活動を知っていただくと同時に、教室の外で「学ぶ」面白さを味わっていただきたいと思う。

最後に、マグノリア・カフェを主催した先生方、参加した学生の皆さん、活動を陰で支えてくださった職員の方々に感謝を申し上げたい。また、「MARE」第1集をまとめるに際し、ご協力いただいた皆さんに、心からの謝意を送りたいと思う。

瀬戸内海の四季折々の潮風に想いを乗せて、新しい風を本学のキャンパスへ吹き込んでいく試みを続けていきたい。人と人がつながり、学び合う旅に参加してみませんか。

目次

はじめに	1
シコガク文芸部	2
場所（トポス）の未来を考える	6
空海カフェ	10
日韓文化コラボ	14
隣人と自分の命を守る	18
珈琲・ホビー・ハウス	22
おたく♪シンフォニア	28
インプロを生きる。	32
現代ソーシャルワーク研究会	35
ポピュリズムとヘイトクライム—新自由主義思想と社会の分断を背景にして—	37
追録 マグノリア・カフェに関する規程 〈一部抜粋〉	42

はじめに

学長 末吉 高明

マグノリア・カフェが問いかける私たちの生

メタバース時代が幕開けした。メタバースの到来に向けて、巨大プラットフォームが、ビジネス・モデルの大変革を開始している。2021年秋に、SNSを中心としたFacebookが、Metaに会社名変更をした。2022年になって、メタバースを標準にソニーやヤフーが関連企業を買収する動きが相次いでいる。並行して、自治体や民間企業では、そろってデジタル・トランスフォーメーションが推進されている。また、多くのスマート・シティ<未来都市>が建設され計画されている。世界は、ユニバースとして自明視されていた前提が揺らぎ始めた。

メタバース vs. ユニバースの狭間にあって、私たちは大学キャンパスをどのように認識して新たな歴史的展開を創出すればいいのだろうか。地球上の空間に、VR(仮想空間)、AR(拡張現実)そして、MR(混合現実)を加えて生きる、ホモ・サピエンスが、ユニバースの自明性を喪失した現在、基軸として把握すべきことがある。キーワードは、<身体性>だ。

ある極端な立場によれば、民主主義が多くの国で機能不全となった現実においては、テック(高度科学技術)によるメタバースが解決方法である。民度が低い<人民>によるユニバースの統治は、劣悪な状況を生み出すばかりなので、テックによってメタバースを構築する。そして、大半の<人民>はメタバースで生活をする。その際、各自に対して、生命維持のために必要な食事と排泄を可能とするベーシック・インカムを保障する。一部のエリートによるテックを通じてのメタバース

統治だ。

テックによるメタバース統治は、急進的なモデルではある。しかし、メタバース vs ユニバースの問題構制に対して、重要な視点を投げかける。そもそもメタバースで生活するには、食事と排泄を抜きにしてありえない、ということだ。私たちの身体性を排除して、メタバースでの生活は不可能である。そして、食事と排泄をともなう身体性は、ユニバースによってのみ供給される。

ユニバースのみに支えられる私たちの身体性。飲食を共にするマグノリア・カフェは、私たちの身体性を基礎とした知的交流の空間&時間だ。ここでは、教師 vs 学生、カリキュラム vs 課外活動、といった近代社会が分泌するシステム空間>から、解き放たれて自由と知が創発する。

シコガク文芸部

担当教員：丹羽 章

関 泰子

文芸部紹介

ポストモダン・カフェ時代から文芸部活動を始めて3年目となる今に至るまで、私たちはひたすらこの善通寺の地に「次世代を担う作家」を誕生させるべく、コツコツと活動を続けてきた。

文芸活動を通し、学生たちは自身を拘束する文化や社会について考え、自身を解き放つことができる。文芸部が目指す活動は、文章力の養成にとどまらず、社会を見るための「視力」を上げ、文化を考える「アンテナ」の感度を上げ、そして私たちの中にDNAとして組み込まれてきた文化とは何かについて学ぶことである。

換言すれば、文芸部において本を読み、作品を作ることは、「今どきの若者」が自身のアイデンティティを見出し、自身の置かれた現状に向き合い、一個の人間として確固たる信念を持って生きることを学ぶ営みであると考えている。

(関 泰子)

2021年度の主な活動は部員の作品合評会や読書会である。週に一度ペースで会合を開き、その中で作品・書評を発表する。互いの文に対して忌憚のない意見を出し合うことで、今までになかった視点や技術の獲得が期待できる。現在はコロナ禍によって開催できていないものの、2019年には夏の合宿も行っていた。普段とは違う環境下で部員同士の交流を促進するとともに、創作力を刺激することを目指している。

部員は現在13名。文学部3回生の熊本民葉を部長兼編集長に据え、教員の丹羽章と関泰子が顧問を務めている。部員それぞれが独自の世界観を

醸成しつつ、創作に励んでいる。2021年は絵本や心理学古典の書評から、歴史、恋愛、SF、ホラー小説など多岐にわたる部員の創作を皆で味わい批評してきた。世界や社会に対する目線が異なる部員が一堂に会することで、議論の中で自分一人では気づけない新たな視点を発見する機会も増えた。

本を読む、作品を仕上げるという作業は己を知ることにつながる。文のスタイルには書き手の思想が見え隠れする。それは一つの自己表現なのだ。作品を通して自分自身を見つめ直したい、他者の考えに触れたい、或いは自分の世界を表現したいという方は、気軽に文芸サークルに足を運んでほしい。「小説を書く」という魅力的な沼にはまり込むことは必至である。

(社会学部 3年・武下 佳都)



会合風景 (2021年7月)

「今」という時代と文芸活動

文芸部の主力となるのは、「Z世代」と呼ばれる学生たちである。「Z世代」という用語はメディアでも大きく取り上げられているから知っている人も多いであろう。以下は「新人類」と呼ば

れた世代に属する教員による「Z世代」学生観察記である。

「近代」にどっぷり首まで使った世代にとっては、彼らは羨ましいほど自然に「ポスト・モダン」を生きているように見える。

彼らが紡ぎ出す作品の中には、私たちが当たり前としてきた理性主義や合理主義、道徳、普遍主義といった概念は存在しない(あるいは中心的なテーマではない)。こうした作品群に対し、ルーティーンとも言える私の問いかけは「テーマは何?」「何が言いたい?」「どういう読者を想定している?」であった。それに対し学生たちから返ってくる言葉は「テーマはないです。ただ伝えたいのです」「こういう展開の方が私にはぴったりくるのです」「読者は想定していません。私はこう書きたいのです」等々。こういう答えは私にとっては新鮮な驚きであったが、現在でも完全に彼らの世界を理解したとは言えない。やっぱり分からないことが多いのだ。

ただ彼らの「ポスト・モダン」的な感性は「近代」を意識したところからスタートしていないようだ。むしろ「近代」に対して驚くほど無関心、無感覚に見える。我々の生活は近代的システムの恩恵の上にあることは間違いないのだが、彼らにとってそんなことはどうでもいいのか、と疑問に思うこともしばしばあった。いや、むしろ教員からの執拗な問いかけや辛口のコメントが初めて彼らに「近代」を意識させるきっかけになったのではないかと考えている。

しかし一方で、彼らの抱える悩みはといえば恋愛だったり、友人関係であり、家族であったり、意外とフツーだったりするわけだが、そこにポスト・モダンの理想が見られることはない。拗らせた関係を持て余した挙げ句、結局は近代的「道徳」に救いを求める。お得意のスマホを使ってグ

グって見たところで、悩みの解決の糸口すら見つからない。デジタルネイティブと呼ばれる世代であっても、少ない経験知をネットの知識で補うことなどできない。感性のみポスト・モダン化していても、自我は近代システムの中で溺れかけている。教員からの問いかけによって、彼らはようやくそのことに気づき始める。

小説を読む／書くというものは、そうした「いびつに不均等に成長している自分」と対峙する行為である。自分を中心とした世界、「何が分からないか分からないのが強み」的全能感に別れを告げ、近代システムによって作られている自分を再認識し、自身の愚かしさや脆弱さを理解する。そして、「Z世代」だ何だと時代にチャホヤされる自身の奥の奥に閉じ込めていた「陰キャ」面と対峙する。「陰キャ」上等、である。「陰キャ」とは考える人なのだ。小説を書くということはこうした思考プロセスの螺旋を行きつ戻りつしながら、人格を持った人間としての営みを取り戻すことであろう。

小説を読み、書き、批評しあう、こうした作業を通じて、学生たちは自らが生きる時代に対する批判精神を培い、自身のアイデンティティを模索し、同時に新しい時代はどうあってほしいのか、彼らなりのビジョンを持つ。担当教員たちは彼らが苦しみながら作品を生み出す作業を見守る存在でしかないが、部員たちの歩みは均一ではない。この社会において自分とは何者なのかに気づき始め、確認作業として作品を書き続ける学生、書くという作業自体が精神的安定と考える学生、「小説を書く」という行為が「映え」だと考える学生、その動機もペースも様々である。しかし、どのような望みや期待を抱いてパソコンに向かうにしても、彼らは大いに真面目である。真っ白なページの上に自身が生み出した言葉による作

品を仕上げていく。そして相互に感想を言い合う中で、否が応でも自分自身を知っていくことになる。こうした学生の成長過程を見続けた1年間であった。

(関 泰子)

「場」としての文芸部で何を得たか

私は、毎年文芸部で書評を書いている。私にとって書評を書くことは、自分を見つめ直すことである。1つの作品と向き合い、自身の言葉で批評するなかで自分が何に興味を持っているのか、自分が何を大事にしているのかといったことを考え続けてきた。書評を書く際、本の選定や書評の内容に自身の深層心理が現れる。その本になぜ惹かれるのかを突き詰めていくと、そのときどきに自身が恐れていたことや考えていることが見えてくるのだ。別れについて、愛と死について、自分を形づくる普段の選択について、これらは、インターネットが普及した現在でも変わることのない課題である。もちろん、普段からこのようなことを考えている自覚はない。しかし、自身が心ひかれた作品について批評を行う中で、無意識下で考えていた問題について考える機会を得るのである。3年間、文章を通して自身の内面や過去と向き合った結果、自分が持っている主題とは何なのかを考えるに至った。

文章を書くことは、自身の深層心理に触れることであり、自分というものをむき出しでさらけ出すことにつながる。お互いの文書を批評し合うことは、自身が感じている問いが自身だけのものなのか、それとも普遍的なものなのかを確認し合うことでもある。文芸部はお互いの主題について考える場といえるだろう。

(社会福祉学部 4年・吉田 真由美)

小説とは即ち鏡である。この一年を通して、それを幾度となく実感した。作品を書いている時も、誰かの作品を読んでいる時も、誰かに自分の作品を読んでもらっている時も、常にそのような感覚があった。文体から設定に至るまであらゆる要素に書き手の影が見え隠れしていた。

私自身の影は、予想通りであった部分と予想だにしなかった部分が半々といった様相であった。後者の存在に驚くことも多々あったが、それ以上に喜びもあった。まだ見ぬ自分との出会いがさらなる好奇心をもたらしてくれた。自画像を掴みかねていた私にとって、これ程に分かりやすい形でアイデンティティを確認できるのは何よりのことだった。勿論そこで見つけた自分はポジティブな姿ばかりではなかったものの、文字を通して今まで見つけられなかった自分を発見できた満足感が大きかった。それ故に、嫌な気分になることは少なかった。

そして、自分が生きる時代についても考察するようになった。自分の人格を起点にした上で「何から影響を受けた可能性があるのか」「影響されてどのようなになったか」というような切り口で周囲の環境を見るのである。これによって得た気づきも多い。例えば義務教育の問題点、世代対立を煽る存在、レッテルとイメージが先行する社会などが挙げられる。執筆活動を続けたことで、ここまで思考の枠を広げられた。

私は今の自分を善とも悪とも思わない。ただ鏡を通して見つめ続けるだけのことだ。何が世の中で何が必然か、自分が臆病であるか否か、全ては私が見聞きした上で決める。直接話したこともないような誰かから生き方を勝手に定義され、促されて自己批判をするのではなく、より自画像を明瞭にするために筆を取り続けようと思う。そして、書き上げた作品を読んだ人たちが「面白かった」

と言ってもらえるような書き手になりたい。自己主張と挑戦的な言葉を操る才能に溢れた人へ向けて、この言葉を以て締めとさせて頂く。

(社会学部 3年・武下 佳都)

自分自身を超えるために

我々は人間を「人材」としか考えない社会に生きている。「学校」は優秀な「人材」を育てる場であることを誇り、学生達は価値ある「人材」に己を作り上げようと努めている。政治家たちは「生産性がない」人間を二流国民とみなし、そのような社会が「生産性がない」障害者には生きる価値がないと考える人間を生み出している。それが我々が生きている現代日本の社会である。

しかし我々は「人間」である。「人材」であることを求められる世の中で、「人間」として生きている。そのことの「違和」から、現代の「文学」が生み出されている。学生達の作品を読んでいると、そのように感じられることがある。エリートである優秀な「人材」、自信に満ちた現代の「強者」たちとは対照的な彼らは、それでも自分の「違和」を大切に、「違和」を自覚することの重要性を、社会に向けて訴えていくべきだという直観を持っている。

文芸部という「場」を持つことによって、彼らは互いの表現を磨き合いながら、他者の持つ「違和」への理解を深め、己の「違和」の認識を深めていく。それを積み重ねていくことで、表現することの意義への確信を深め、表現することには意味があるという希望と自信を養っていると思う。

カフェ活動や作品執筆は部員にとっての「逃げ場」でしかないという批判があるかもしれない。たしかに作品が自己憐憫でしかない場合もありうる。しかし、それにとどまる限り作品は停滞する。文芸部という「場」は、そのような停滞を許

さない雰囲気を持っている。彼らは個々に、社会に対する己の違和を表現し続ける。そのような「個」が、自分以外にも存在している。その事が彼らを励まし、促す。文芸部という「場」はどのように機能していると私は考えている。

(丹羽 章)



3年間に発行した部誌と個人作品集

場所（トポス）の未来を考える

担当教員：福永 健一

ネルソン橋本 ジョシュア諒

活動の理念

トポス (τόπος) とはギリシア語であり、英語で place、日本語で「場所」と訳される。また、「何かが生起するところ」や「人の考えや議論が出発するところ」という意味もある。ようするに、トポスとは「(何かが生まれ何かが存在する)場所」である。トポスは私たちの身の回りに遍在している。家の中は私的な場所、駅や職場や街中は公的な場所、車の中は公とも私ともいえる場所である。人はあらゆる場所で、他者と関わり何かを生みだしてきた。

COVID-19が、トポスのありように大きな変化をもたらしたのは、もう2年も前のことである。人が集まる場所は封鎖され、人間は距離をとらなければならないとなり、テレワークや遠隔授業など会わなくて済む情報通信技術が重宝された。さまざまな場所からにぎわいが消え、誰もいなくなった。人が集う場所は、コロナ以前と以後でそのあり方を全く変えてしまった。

私たちがマグノリア・カフェで取り組むのは、COVID-19 がトポスにもたらしたさまざまな影響について考えることである。とりわけ、わたしたちはパンデミックで何を失ったのかについて、場所（トポス）をキーワードに考えてみたい。パンデミック以降、場所は大きな変容を迫られた。リアルな場所が空洞化したり失われたりしているいっぽうで、オンライン上に新しい場所ができつつある。人の集まるトポスが今どうなっているのか、これからどうなるのか、どうあるべきか。参加者とともに、場所（トポス）について考え抜き、討議し、体感するためにそこへ赴き、思索し

た成果を発信したい。

活動の報告

当初の活動計画では、県内外の観光地などさまざまなトポスへ赴きインタビューなどを予定であったが、感染拡大による活動の制限を余儀なくされた。そこで、学内での勉強会やドキュメンタリーの鑑賞会、コロナ禍でも開催されている県内の展示会等イベントへの参加といった活動を催した。活動の記録は以下の通りである。

(福永 健一)



マグノリア学寮1階スタディラウンジにて第1回目の勉強会（2021年7月7日）

バーチャルな場所（トポス）における人と人のつながりを考える

COVID-19の感染対策として、不要不急の外出を控える要請が出たことで、リアルな場所で人と人が出会う機会が減ってしまった。かわりにオンライン飲み会やWEB会議が日常的に行われるようになり、コミュニケーションを行うトポスのオンライン化が加速した。

臨床心理学者で、マサチューセッツ工科大学教

授のシェリー・タークル (1948-) は、オンライン上で繰り返される会話についての研究を重ねてきた。テクノロジーが人間に及ぼすさまざまな影響についての研究は、本カフェのトポスの考察に対して深い洞察を与えてくれた。第1回の勉強会で彼女の本を講読する中で、印象に残った言葉を紹介したい。

「(前略) 人生は、手っとり早い解決を求める問題のようなわけにはいかない。人生とは会話であり、人は会話をする場を必要とする。バーチャル世界は確かに私たちに会話のための広いスペースをもたらし、スペースは豊かになっていく。だが、現実世界がかけがえのないものであるのは、継続性の支え方が違うからだ。現実世界は現れたり消えたりしない。人は現実世界に束縛される。簡単にログオフしたり抜け出したりはできないのだ。人はさまざまなことを乗り越えて生きていくようになる (Turkle 2015=2017: 424)。」

このパンデミック以前から、テクノロジーの凄まじい進歩により、スマートフォンなどを介してフェイス・トゥ・フェイスではないコミュニケーションの便利さを私たちは享受してきた。また、このデジタル時代の中でコミュニケーションを行う場所や方法は大きく変わり、多様化してきた。しかし、タークルが指摘するように、バーチャル空間とリアル空間での人とのつながり方には決定的な違いがある—現実世界の中では「ログオフ」できないのだ。オンラインの空間では、フィルターを使って見せたい自分を見せ、ログインしてつながりたいときにだけつながることが簡単にできてしまう。いま話題になっているメタバースは、自分が作ったアバターを通して、アバター間での快適な付き合い方の実現を約束している。まるで現実世界からのログオフが可能であるかのように、メタバースで生きられる未来が期待されてい

る。だが、私たちは「現実世界がかけがえのないものである」ことを知っている。リアル空間とバーチャル空間のめまぐるしい変化の中で、「人は現実世界に束縛され」ていることを思い起こしたい。唯一無二の現実世界がある限り、本カフェとしては、人の集まるトポスがどうあるべきか、今後も議論を深めていくことに大きな意義がある。

(ネルソン橋本 ジョシュア 諒)

香川ゲーム条例ドキュメンタリー鑑賞会

日本初のゲーム依存症対策に関する条例として2020年4月1日に施行された「香川県ネット・ゲーム依存症対策条例」の施策プロセスや妥当性などの問題について多角的に検証した瀬戸内海放送制作のドキュメンタリー番組「検証 ゲーム条例」(2021年6月27日放送)が、民間放送連盟賞テレビ番組報道部門で優秀賞を受賞した。



マグノリア学寮1階レクリエーションルームにて鑑賞会とディスカッション (2021年11月11日)

香川県内で賛否両論を巻き起こしたゲーム条例について学び議論する好機と考え、本ドキュメンタリーの鑑賞会を実施した。

番組内では、条例の妥当性を裏付けるアンケート調査のデータ集計の杜撰さ、パブリックコメントの捏造疑惑、ゲーム規制を正当化するための科

学的根拠の薄弱さなどの問題が指摘されていた。市民の代表として行政をうけもつ議員たちの、科学的リテラシーの皆無さ、自分の意見を押し通すためなら捏造も厭わない牽強付会さ、批判や反対の声には聞く耳も持たない傍若無人さ、そういった自身の醜さに気づきもしない厚顔無恥さが画面越しにありありと伝わってきた。

視聴後、学生たちはこんな大人になりたくないと思ったと言い、教員として私は若者たちをこんな大人にしないためにもっと教育を頑張ろう、と思った。ふだんテレビを観てこんな気持ちになることはない。賞を取るのもうなずける。

視聴後は、ゲームすることを行政が規制することはいけないことなのか。いけないとすれば、それはなぜか、根拠は何か、といったことをリベタリアニズム（自由）とパターナリズム（介入・干渉）の区分をもとに議論するなどした。

このごろは、人を批判してはいけないという風潮がはびこっている。とはいえ、ダメな大人を見て反面教師とするのも重要な学びであろう。今回のドキュメンタリー番組を観て得た感想である。なんでも無条件にリスペクトするよりも、ダメなものは見くだすというディスリスペクトの作法も身につけてほしい。とはいえ、それが行き過ぎるとシニシズムに陥ってしまう。バランスを保つのも肝心なことだ。

（福永 健一）

100年前の近代的トポス、100年後のゴミなきトポス

香川県多度津の100年前を知ることのできる展示が行われた。ガラスケースの向こうに並ぶ明治・大正期のさまざまな写真や資料から、当時の生活を感じることができた。展示品は、動かない「もの」であるが、それらは近代化を象徴する多

くの重要な開発の歴史を物語っていた。四国の近代化をリードした多度津は、100年前は実に活気に満ちていた。100年前のこのトポス（場所）は、発電所や鉄道等が整備され、労働者やその家族で賑わい、こんびら参りの参拝客と商売人で栄えていた。急速な開発により、近代を代表する立派な建物が建ち、多度津には「もの」と人が溢れかえっていたに違いない。



多度津町立資料館の企画展「ヒストリート多度津」（2021年10月9日）

しかし、その華々しい近代化の先には何が待っていたのだろうか。社会批評家のイヴァン・イリッチ（1926-2002）は次のように述べる。「（前略）『開発の時代』が終わろうとしているいま—そもそもこの種のを地球上に乱造するのが間違いだったのだ—成長事業が築き上げた成果も急速に廃墟や瓦礫と化しつつある。今後私たちはこの破壊された世界のなかで生きる術を身につけなければならないのだ（Illich 1992=1996: 130）。」もちろん、現在の多度津は破壊されているわけではない。豊かな文化があり、リノベーションを後押しする多様なまちづくりが展開されている。しかし、寂れた街並みも目立つ。シャッター街や空き家は「近代化の遺物」と言っても過言ではない。

今日では、「破壊された世界」から目を背けるように、オンラインの空間が拡大している。コロナ禍により、在宅ワークやリモート学習といった非対面型の生活様式が急速に進んだ。現実の世界が失われる一方、「理想の世界」がオンラインの中で構築されている。しかし、オンラインで「理想の世界」の到来を信じて、現実世界の「破壊」には歯止めをかけることはできない。私たちが暮らす今の世界を見つめ直し、壊れた世界をケアすることは、このパンデミック以前から人類の喫緊の課題であったのではないだろうか。近代の開発観から早急に抜け出し、100年後のトポスに思いを馳せたい。



上勝町ゼロ・ウェイストセンターのスタディーツアー（2021年12月12日）

日本初のゼロ・ウェイスト宣言を行った徳島県の上勝町に世界をケアするひとつの取り組みがある。3R（リデュース・リユース・リサイクル）の精神のもと、ゴミの分別・収集を行うゼロ・ウェイストセンターでは、80%以上のリサイクル率を誇る。捨てられる「もの」を増やすのではなく、次世代のことを考えずに「もの」を作るのでもなく、「もの」を生かす作法がそこにはあった。オンラインの技術は「破壊された世界」を直すことはできない。今後、テクノロジーのさらなる発展

により、バーチャルとリアルの境目は揺らぎ、オンライン空間がオフラインの場所へ侵食していくことが予想されている。しかし、リアル空間／バーチャル空間の是非を論じる前に、廃棄物を積み上げるトポス／ゴミなきトポスの分岐点に、私たちは立たされている。「壊れていく世界」を歩む私たちは、100年前の近代的トポスを振り返り、100年後のゴミなきトポスを想像・創出する責任を負っているのだ。

（ネルソン橋本 ジョシュア諒）

参考文献

- Turkle, Shelly, 2015, *Reclaiming Conversation: The Power of Talk in a Digital Age*（日暮雅通訳, 2017, 『一緒にいてもスマホ—SNS と FTF』青土社。）
- Illich, Ivan, 1992, “Needs,” Wolfgang Sachs ed., *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge as Power*, 88-101（初川宏子・三浦清隆訳, 1996, 「ニーズ」『脱「開発」の時代—現代社会を解説するキーワード辞典』晶文社, 129-145.）

空海カフェ

担当教員：伊藤 松雄

わたしたちの活動

のどかな日本の原風景として日本最初の国立公園に指定された瀬戸内海地域は、かつては希少な景勝の地として名を馳せていた。しかし、今では山は削られ、海はゴミで汚れてしまっている。この現状は、多くの人々が身近な風景に価値がないとし、安易な開発を容認してきた結果である。はたして、本当に価値がないのだろうか。身近な風景に潜在する自然ならびに文化的価値を再発見し、その意義を見いだすことで、保全の心を育成できる。



崩れゆく身近な環境に近接する文化財

本学のある善通寺市をはじめ、香川県は史実として二千年以上の歴史を誇り、瀬戸内の古代都市として栄えてきた。そのため、多くの文化財や文化施設が今に伝えられ、県内の随所に二千年の歴史が刻んだ文化的景観が見いだされる。すなわち、香川県は上述の問いを実践する上で好適な地と

考えられ、私たちが身近な風景の中に埋もれた自然や文化的価値を再発見できるのみでなく、これをまとめて小冊子やリーフレットとして発信することで市民に上述の問いかけをすることができる。

「問」の実践

前述の「問い」を具体化するために、学習のみに留まらず、積極的に発信していく。そこで、以下の三点を遂行する。

1. テーマの設定：善通寺市や香川県の身近な風景を対象とし、文化を生み出す契機となった自然や自然に埋もれた文化財を探索し、自然と文化の相互作用の観点からそれぞれの成立に関わるテーマを設定する。
2. 現地体験と理解：具体的なテーマにそって現地に赴き、現状を見聞取材し、その成立について文献調査する。さらに、テーマの要点を整理し、自然や文化的価値を概観する。
3. 発信：整理・概観した内容を冊子やパンフレットにまとめ、善通寺市内および県内で配布する。さらに、冊子やパンフレットの配布状況（設置した配布物の減衰）を調査することで、「問」の実践の有効性を把握し、次の活動の反省点として活用する。

善通寺市における実践

本年度の善通寺市における活動は、四国遍路「七カ所まいり」をテーマとした。この遍路は、江戸時代に「足の弱き」巡礼に用意された短縮遍路であった。この遍路がなぜ準備され、人々を魅

了してきたのか、その自然と文化財を見聞することで理解し、発信することにした。このテーマの遂行に当り、本活動の一部で善通寺市地域おこし協力隊員が参加した。四国霊場札所全七カ寺について実地見聞を行なった結果、これらの霊場はその自然条件の中で誕生し、長い歴史の中で消失再建が繰り返されたことが分かった。このプログラムは、善通寺市役所の補助を受けることができたので、冊子の製作費の一部を市役所に依頼した。冊子は市民に配布されるとともに、高松駅に設置し、次年度はその減衰を調査する予定である。



甲山寺と金倉寺の取材の様子

香川県における実践

本年度の活動は二つの活動内容からなる。すなわち、(1) 新たなテーマを探す活動と(2) 大学祭への参加を前提とした活動の二つである。

(1) 新たなテーマを探す活動

小豆島は日本有数の観光地として知られているが、近年の人手不足から自然景観の保全が必ずしも十分ではない。そこで、小豆島を訪れ、その現状を理解するとともに、埋もれた文化財を観光素材として発掘、かつその観光収入によって自然保護の推進が可能かどうかを考えようとした。新たな観光収入を得るためには、新たな観光素材を発掘する必要がある。まず、既存の観光地（オリーブ公園や映画村など）を訪問した。



小豆島の観光地における取材の様子

次に石切丁場（天狗岩など）を訪れた。瀬戸内の石切丁場は天下の名城と詠われた大坂城の巨大な石垣に使われたという歴史があり、近年日本遺産に登録された。これに伴い、博物館等も建設されたが、観光パンフ等を概観する限り、必ずしも観光資源として十分に活用されていない。こうした石材の文化的価値を多くの人々に伝えることで、小豆島の自然景観の保全活動を推進できると考えた。

小豆島の天狗岩丁場を訪れた際、その風景が、メンバーの一人に強いインスピレーションを与えた。この風景は、アニメ「鬼滅の刃」のワンシーンにそっくりだったのだ。アニメ「鬼滅の刃」は、2021年度の流行語「全集中」を生みだし、興行収入400億円をたたき出した人気アニメである。そこで、「鬼滅の刃」を活用した観光地を次年度のテーマに設定し、1枚の写真を撮影した。このことを知ったメンバー外の学生から「鬼滅の刃」を卒業研究のテーマにしたいとの申し出があったため、その一部をそちらにまわすことにした。

(伊藤 松雄)

カフェの活動の中で、とくに印象に残ったのは小豆島への訪問だ。小豆島の気候を活かしたオリーブ栽培や天狗岩丁場を見学することで、自然と人類の文化の共存について学ぶことができた。また、それらを活かした観光の新たな在り方について今後考えてみたいと感じた。

(社会学部 3年・安藤 彩七)



天狗岩石切丁場にて

(2) 大学祭への参加を含めた活動

四国学院大学の構内は全体にきれいだが、一部に雑草が繁茂している。繁茂する雑草のエノコログサ（通称ネコジャラシ）を見たメンバーの一人が、新たにインスピレーションを得た。アニメ「ドクター・ストーン」のストーリーで、主人公が野生のネコジャラシを使ったラーメンを作ったことを思いだしたのだ。「鬼滅の刃」で紹介したように、アニメは近年「巡礼」という形態で観光に大きな影響を与えている。また、雑草は身近な自然の中に潜む文化を明らかにできる素材と考えた。そこで、今回はアニメ「ドクター・ストーン」に登場するネコジャラシ・ラーメンを試作することで、食文化の本質を理解し、人と雑草の共存を考える機会とした。また、この活動を通じて、本アニメのテーマである原始の世界も理解できたので、これを人々に伝えるために、観光収入による自然保護を念頭に、原始の森エコ・ツアーを考案した。

ネコジャラシ・ラーメンの試作はビデオと写真に記録し、大学祭で発表することにした。

① ネコジャラシの種子の採種

これは大変困難な作業であった。雑草の脱粒性という特性のため、成熟したタネはすぐに落ちてしまうのだ。そのため、メンバーは苦勞して袋掛

けなどの手段を駆使し、何とか採種した。このことは、アニメのシーンとは大きく異なる点であった。



ネコジャラシ種子採取の様子

② 脱穀

これもアニメでは簡単にできる内容となっていたが、種子を確実に採取するには、穂をたたくのではなく、一穂ずつ丁寧に採種する必要があった。

③ 粃すり

これもやはり大変な作業であった。タネが小さすぎて粃すりができない状態だった。そこで、他の植物の例を検索探求し、軟式野球のボールを使って何とか粃すりした。

④ 製粉

種子をきれいに洗った後、製粉を試みたが、市販のコムギ粉とは同等にはならなかった。穀物の種子を微細に製粉するためには、大きな機械を使って強力で粉砕する必要があったのだ。機械文明の凄さの一端が理解できた。

⑤ 調理・試食

ネコジャラシ粉は粘性がないため、麺にはならない。そこで、コムギ粉を半量ほど入れて製麺した後、アニメで描かれたように調理し、試食に至

った。主人公が結論づけたように、おいしいものではなかった。改めて食文化を芸術にまで高めた文明に敬意を表したい。



糺すり（左）とラーメン試作（右）

⑥ ビデオ製作

ビデオにナレーションをいれる時間がなかったため、アニメのナレーション・シーンを交えたビデオを作製することにした。音合わせにやや手間取ったものの、面白いものに仕上がったと考えている（一部はビデオに収録）。

⑦ 大学祭の準備

1. テーマの看板製作

大学祭では、ブースの装飾は極めて重要である。まず、看板を手描きで作製した。



大学祭向け装飾看板作製の様子

2. アワ麺（ネコジャラシ代替品）の試食会の準備

大学祭の衛生管理の上で問題があるとして、ネコジャラシ・ラーメンの提供は不許可になった。そこで、代替案として「アワ麺（ネコジャラシの

近縁栽培種）」を採用した。突然のアクシデントに対して、諦めるのではなく、代替案で対処するということを学んだ。

3. アワ麺（ネコジャラシ代替品）の試食会の実施

他のカフェも同様だが、構内の店舗配置が悪く、客足は悪かった。メンバーが宣伝活動を行い、何とか完売できた。コロナ禍で外部の客は少なかったものの、一人の父兄が本カフェの企画内容を聞いて「来てよかった」と話してくれたことは印象深かった。自然と文化の関係がネコジャラシ・ラーメンの試食というイベントによって理解された一瞬だったと考えている。

4. 小冊子とリーフレットの作製・配布

本カフェでは、「問」を実践するにあたり、「伝える」ことを重視している。なかでも、紙媒体による伝達は最重要課題の一つである。本年度は3種類の紙媒体、冊子「散策善通寺」、リーフレット「原始の森・原始のメシ」と「鬼滅巡礼」の3種類を発行し、自然と文化の関係を解説し、新たな観光素材を提案、さらに自然保護の心を伝えていく予定である。

(伊藤 松雄)



2021年度の冊子とリーフレット

日韓文化コラボ

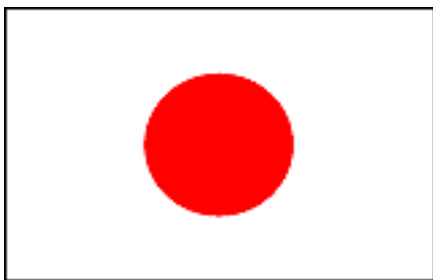
担当教員：李 静淑

わたしたちの活動

映画、音楽、ファッション、スポーツなどグローバル化で境界が崩れつつある。韓国ブームにロマンを感じても、その裏側にやはり日本と韓国とは相当違うのだという日本人の伝統的な韓国観が残っているように感じる。

この心理的ミゾを感情的議論にしないために、一定の距離をおいて話そうとすると、かえってお互いの心理的距離が拡大する。双方の信頼関係を築くためには、例え、言い争ってでも話し合い、小さな差異は認め合って、その上で共通の認識を持ち合うことが、結局は心理的距離を縮めることに繋がるであろう。

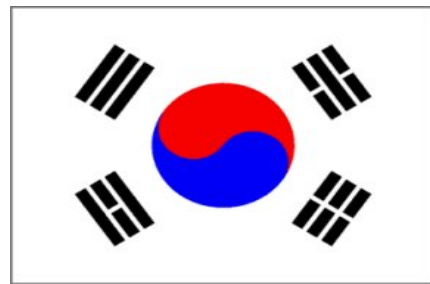
まず身近な現状を認識し、考察する。距離的に近いことから風習など似ているところもあるが、微妙な違いもある。多少の差異を乗り越えて、大局的な見解を相互に持つことが肝要である。このマグノリア・カフェがささやかでも、お互いの理解に近づくための一歩になることを強く願っている。



日本と韓国は、「近くて遠い国」と言われているのは何故なのか、「近くて近い国」にするには何が必要なのかを考えるためにも、まず、戦前の歴史観から解放され、お互いに独立国同志の尊厳と理解が最優先されなければならない。

しかし、日本では似て非なるものへの嫌悪感と

昔の優越感が未だに残っているように思う。そして経済的に対等になった今もお互い自らと区別したい気分があるように感じる。また、韓国は歴史問題を提起し続けるのは「近い」ゆえに自らを日本とは差別化したいところがあるからではないだろうか。



上記を踏まえて、現在の日本と韓国の社会、文化をはじめ、様々な分野を比較しながら、両国の友好な関係づくりを深めるコラボ(コラボレーション)を目指したい。

歴史の理解を深め、近くて近い国へ

1904年の日露戦争の開戦に伴い、日本軍は韓国全土を軍事的に制圧し、韓国の主権侵害を推し進める内容の日韓議定書を提出する。当時、日本では韓国を将来的に付庸国あるいは併合することを目的として、韓国に対する支配力を段階的に強めていき、1910年に韓国を「併合」した。

韓国併合以後は、創始改名や日本語教育といった皇民化政策が取られ、民衆は「日本人の義務」を果たすように常に強要されたが、支配者であった日本人はあくまでも民衆を不完全な日本人とみなし、対等のものとは見なかった。この差別・蔑視が、今日の日本と韓国の歴史認識の衝突・ギャップを深刻化させる重要な要因の一つとなっている。

その後、1945年8月15日、日本の無条件降伏が発表され、35年にわたる植民地支配が終了した。日本では敗戦の日であるが、韓国では日本の統治から解放され、光を取り戻したという意味から「光復節」という祝日となっている。

1965年には「日韓基本条約」が結ばれ、日本と韓国の国交が正常化された。日韓基本条約を結んだ際、日本は8億ドル以上の経済援助金を韓国に支払い、今後過去のことは持ち出さないということとで決定した。



また、1998年には「日韓パートナーシップ宣言」をとりかわし、その中で日本は「植民地支配により多大な損害と苦痛を与えた歴史的事実に対し痛切な反省と心からのおわび」を述べ、韓国側はこれを評価し、「未来志向」の両国関係を築くことを宣言した。

さらに、2002年のサッカー・ワールドカップの共同開催に向けて、日本の大衆文化も解禁され日韓関係は急速に改善し、2003年から2004年にかけて冬のソナタが放送され、「冬ソナ現象」と呼ばれるほどの韓流ブームを巻き起こした。その後も若年を中心に K-pop をはじめとする韓国の文化が人気を集めている。

その一方で、2015年の日韓両政府に合意された慰安婦問題や、現在も続いている徴用工問題など日韓関係において、向き合うべき課題は数多く残されている。

しかし、上述した「日韓パートナーシップ宣言」にも掲げたように「未来志向」の実現に向け、日本と韓国は戦前の歴史観から解放され、お互いに尊厳と理解が最優先されなければならない。今まで以上に日韓関係を向上させていくためにも、さらに交流を深めていくことが重要である。

(社会福祉学部 4年・大西 寧々)

なぜ「冬のソナタ」が流行ったのか

1990年代から2000年初頭にかけて、韓国芸能界は海外進出戦略を練り、アメリカに次いで第2位の市場規模を持つ日本のエンターテインメント市場に入り込むことを目標にしていた。当時、日本のテレビドラマでは、身近なアイドルを起用して、ごくありふれた庶民的な生活の中で起きる恋愛物語をテーマにしたものが一般的であった。

つまり、基本コンセプトとして、ドラマの主人公の男女はスターというものではなく、自分たちの隣にいるような、ごく身近な存在として視聴者から共感を得るような仕立て方であった。視聴者がテレビに映っているタレントたちに共感と親しみを持つことが、視聴率を稼ぐ重要なポイントでもあった。



しかし、アイドルに熱中する若者はともかく、食い足りないドラマと感じている大人たちは多かったため、視聴率も若者偏重の数字しか出ず、安定感がなかった。

そんな中、2003年に日本のテレビに登場した韓国ドラマ「冬のソナタ」は、日本の視聴者に衝撃を与えた。

このドラマは、日本での韓流ブームの火付け役となったが、すでに台湾や中国など中国語圏で人気を博していたものだった。そうした実績から、アジア市場で生き残るほどの魅力があったともいえよう。

事実、「冬のソナタ」は、当時の日本のテレビドラマの主流であったアイドル中心とは違うものであった。主役のカン・ジュンサンを演じるペ・ヨンジュンは、ヒロインに対する見事なまでの犠牲愛を演じ切り、女性に対して不器用な日本人男性や、夫に不満を感じていた中高年層の女性の心を動かした。

それに対して、ヒロインを演じたチェ・ジウは“泣きの女王”と言われるほど、日本人の感性の奥深くにまで染み通る悲しみを表現する演技力と、負のパワーをいかんなく発揮していた。日本のテレビドラマに物足りなさを感じていた、中高年女性の乙女心に突き刺さったのである。

「冬のソナタ」には、それまでの欧米のドラマや映画などにはない、自分たちに似たアジア人が主人公でありながらも海外のドラマという真新しさがあり、中高年女性は、かつて憧れた叶わぬ恋の理想像を、このドラマの中で感じていたのであろう。

「冬のソナタ」の日本上陸は、日本でのアイドルたちが演じる学芸会的な緩いドラマとは一線を画し、大人がズッポリとはまり込み、誰もが好む普遍的な「愛」に触れる絶好なタイミングであったのだ。

「冬のソナタ」から始まった韓流ドラマブームは今日まで約20年近く続いており、当時熱狂していた中高年世代の娘の代まで続いているのが

現状である。

また、近年はNetflixやアマゾンプライムなどの動画配信サービスで手軽に韓流ドラマや映画が観られる時代になった。これからもドラマを通して日韓文化交流が継続していくことを望んでいる。

(社会学部 4年・大畑 なつめ)

K-pop が日本で流行った背景

現在、音楽市場世界2位を誇る日本の音楽業界では1970年代頃からアイドル文化が盛んで、ピンクレディーや松田聖子に続き、モーニング娘、AKB48など可愛らしいアイドルが人気を集めていた。こうしたアイドル文化が日本で定着していく中で、歌だけでなくパフォーマンスを見せる歌手が増加しつつあり、大衆もより完成度の高いアイドルを求めるようになっていった。



そのような中、メンバーのスタイルの良さやダンスパフォーマンスのクオリティの高さで注目されてきたのがK-popアイドルだったのである。特にメンバー全員がモデルのようなプロポーションでセクシーさを全面に押し出した「少女時代」や「KARA」は新鮮であり、2010年から2011年頃にかけて東方神起やBIGBANGなど数多くのK-popグループが流行した。

また、音楽文化が盛んでアイドル文化が確立されるなどK-pop文化開花のために最適な環境で

ある日本に対し、韓国の芸能事務所が積極的に K-pop アイドルの活躍を推し進めてきたこともブームの要因となっている。

しかし、2012 年 8 月に李明博前大統領が竹島に上陸して以降、歴史問題で日韓関係は冷え込んでいったため、日本のメディアでも K-pop の露出が急激に減り、初期の K-pop ブームは衰退していった。

その後、再び K-pop ブームが巻き起こったのは 2017 年以降である。TWICE、BLACKPINK、BTS の 3 組が火付け役となった。ブームを支えるファンの大半は、物心ついた時から K-pop が身近にあり、そのきらびやかなパフォーマンスを見ながら育ってきた、今の若者たちである。

特に、2017 年以降の K-pop ブームを引き起こした若者は、著しく SNS が普及した時代に生まれたこともあって、韓国の文化に触れやすい環境におかれていたこともブームになった一つの要因であろう。

また、K-pop アイドルは従来の可愛らしいイメージだけではなく、整った容姿やメイクが特徴的な“女性が憧れるかっこいい女性”であったため、日本の若者にとっては非常に印象的で憧れの存在として認識された。同時期に韓国の美容やメイク用品、ファッションに関心を持つ若者が増加したことも、日本の女性が韓国のアイドルに憧れを抱き、影響を受けた結果ともいえよう。

さらに、歌詞についても、孤独や自己肯定感の低さなど若者が抱える悩みや劣等感、社会問題等を取り挙げたものとなっており、人々から共感が得やすいものとなっている。

上述のように、K-pop は確かに若者世代を中心に流行し始めたが、最近では、K-pop の歌詞にひかれた、その親世代である中高年代からも注目を集めつつある。その理由の一つとして、家の中で

子どもが聞いている音楽は耳に馴染みやすく、子どもからの影響を受けて、K-pop に興味を持ち始めた親も少なくないようである。

若者から始まった K-pop ブームではあるが、今後は世代を超えたファンが増えていくことを期待したい。

(社会福祉学部 3 年・林 紀花)

画像の出典

- ・ 「日韓パートナーシップ宣言」
<https://toyokeizai.net/articles/-/247050?page=4>
- ・ 韓国ドラマ「冬のソナタ」
<https://c.myjcom.jp/jtele/p/J00000005992>
- ・ BTS 「BTS, THE BEST」
<https://ototoy.jp/news/101252>

参考文献

- ・ 山田敬男・関原正裕・山田朗, 2020, 『日本と韓国の 150 年』学習の友社.
- ・ 金成玟, 2016, 『戦後韓国と日本文化』岩波書店.
- ・ 舘野哲, 2015, 『韓国の暮らしと文化』明石書店.



マグノリア学寮 1 階レクリエーションルームにてディスカッション (2021 年 6 月 21 日)

隣人と自分の命を守る

担当教員：清水 幸一

現代社会への問いとしての私たちの活動

安全に慣れてしまった結果、知らず知らずのうちに危険に対して鈍感になっている現実、防災行政の中で、防災は行政が行うものであるという偏った認識や、また直近の大惨事から学び高まったはずの防災意識が、時間の経過とともに風化している現状。

自然は我々に大きな恵みを与えるとともに、大きな災いをもたらす存在でもある。我々が文明社会で生きる中で、重大な原発事故のような人災に巻き込まれる可能性があることも事実であり、原子力問題も、我々には正しい情報が届かないことも事実。

現代社会に生きる我々は、これからも天災が起きないようにすることはできない。人災も絶対に巻き込まれないように操作することもできない。だが、被災地では、巨大防波堤の建設計画がどんどん進んでいる。江戸時代の人が残した石碑より山側に暮らそうという発想にはならない。

行政に委ねることなく、一方的な情報に惑わせられるのではなく、また人為的に与えられた想定にとらわれることなく、我々が主体的にそのときの状況下で最善を尽くすための知識と知恵と行動力が求められる。

我々自身が、自らで、また仲間と共に自らの命、家族の命、仲間の命、隣人の命を守ることができるために、災害や防災心理についての学習会、また、隣人と生き残るためのスキルを得るために、直接的な体験活動（自然体験活動）を通してサバイバルテクニックを修得することが、私たちの活動である。



マグノリア・カフェが設定する「問い」

現代社会に生きる我々は、隣人と自分の命を守るために、今、また社会を守るため、我々は何をすべきなのか。また何を備えなければならないのか。

マグノリア・カフェのコンテンツ概略

隣人と自分の命を守るために、災害事例検証、防災心理の研究、そして野外教育実習（直接体験）からサバイバルスキルを、仲間（隣人）と一緒に修得する。

清水マグノリア・カフェでの学び

私が今までのPMカフェ活動で学んだことは、自分の考えを持つことの大切さだ。研究会では、主にコロナウィル感染症について各自の視点での意見発表やメンバー間で意見交換などを行い、学びを深めていった。

また、カフェ活動で私が得たものはチャレンジ精神だ。今まで苦手で避けてきたアウトドア活動に挑戦したことで自信に繋がり、清水先生や仲間にも助けてもらって最後までやり遂げると

いう経験を繰り返すことで自信が付き、苦手なことを避けるのではなく、まずは挑戦してみようと思えるようになった。

特に印象に残っているのは小豆島の余島(周囲2.2kmの無人島)をカヌーやカヤックで一周したことだ。私がみんなの漕ぐスピードについていけなかった時、参加していたメンバーの誰一人文句を言うことなく、私のペースに合わせてくれ、声をかけてくれたりしたことで最後までやり遂げることができた。

(社会福祉学部 4年・五百森 智華)



私は約3年間のPMカフェ活動を通して自分自身でも実感するくらい成長できたと感じる。私は3年間、マグノリア・カフェの活動で自分の命の守り方について学んだ。

災害が起きた場合に取りべき行動やコロナウイルスに感染しないための予防など様々な防災知識について学んだ。私は社会福祉学部にも所属しており講義では福祉を中心に学んでいるため、防災について学ぶ機会がなかった。しかし、マグノリア・カフェを通して防災について学ぶことで将来自分自身が災害に巻き込まれた場合や危機的状況に遭遇した場合に役立つとともに人のために行動することができる。

南海トラフ大地震などこれからさらに多くの災害が起こる日本に私たちは生活していく。そのためにも私たちは防災について知識を身につけておくことが必要である。

マグノリア・カフェでは、実際に防災センターに足を運び、災害の恐怖を体験したり、火のおこし方や夜間の登山など様々な方法で命の守り方を学んだ。

私自身、マグノリア・カフェで活動したことで防災や災害について興味を持つことができ、知識を身に付けることができ、実際に災害が起きたときにはマグノリア・カフェで学んだことを活かしていきたい。

(社会福祉学部 4年・岡 大貴)



清水先生と仲間とのマグノリア・カフェでは、災害などが起こったときどのような行動をすれば自分と大切な人の命を守ることが出来るのかについて学びを深めた。

なかでも地震や洪水については、個人個人でこういった時のことで気になったことについて調べ発表をおこない知識の共有をした。

大学祭では、未曾有の大災害が起こったときに生活をする上で重要な時間感覚や距離感覚などが身についているかをお客様にミニゲームを通して体験していただいた。ほとんどの人が成

功することは無く、この体験を通して生活を
する上での基準となる感覚が身につけばと良いと
思っている。

自分が気になったことを調べ、それを共有する
ことで自分の中だけで完結させるのではなく、学
びを発展させることにつながった。また、自分が
信じた情報だけを簡単に信じるのではなく、そ
の情報が正しいのかを仲間たちと話し合っ
て考える大切さを知った。

(社会福祉学部 4年・安藤 健)



今年度、コロナ禍での命を守る方法について
私なりに考えてきた。その中で、カフェで参加
者が意見を出し合い、多様な考え方に触れるこ
とができた。

私はコロナ禍でも遠距離の移動をすることが
多かったため、移動に関する人々の意識の変化
を研究会で発題した。研究会では、他の人のコ
ロナ禍での移動の意識や対策方法を聞くこと
で、自分の新しい気づきとなることが多くあっ
た。

コロナウィルスに対してははっきりとした情報
がないことで、不安になっている部分もある。そ
のため、この研究会で行ったように、正しい知識
を得られるように調べることで、対策方法がわか
り不安な気持ちも解消されると考える。また、
様々な人とコロナウィルスへの意識や対策方法、

この状況の中で感じていることなどを話し合い、
共有することで、多様な意見を知ることができ、
自分の意見をより強く持つことができる。それによ
って、この状況の中で自分らしい生活ができる
ようになっていくと考える。

(社会福祉学部 4年・加藤 智也)



私がこのカフェに参加したのは3年生の後半
で、週一回の研究会には予定が重なることが多
く参加できないこともありましたが、しかし、数
回参加することのできた研究会での友人や自分
の発表と意見交換ではコロナ禍における各々の
学びについて知ることができ見識が深まった。

初めて参加することのできた文化祭の催しで
は、1日中「野外力検定体験」のテントで活動
し、多くの人に楽しんでもらえたことで良い思
い出となり、テントの実施に当たりカフェメン
バーで「野外力検定」を実際に体験し学んだ時
間も非常に楽しかった。サークル等に関わる機
会がなく4年間過ごしてきた私にとっては、1年
生の頃にクラスターで参加した以来の文化祭で
した。コロナ禍ではありましたが、卒業前に再
び友人と楽しくイベントに参加することができ
て本当に良かった。

マグノリア・カフェに関わることのできた人た
ちは皆優しく、このカフェに在籍することができ

て本当に良かったと感じている。コロナ禍でも、素敵な人たちとの出会いがあったことは今後の生活にも希望をもって過ごす根拠になると感じている。

(社会福祉学部 4年・藤本 友惟)



カフェ総括コメント&評価

今年度のカフェ活動は、コロナ感染予防のため、主宰者の研究テーマでもある直接的な体験実践で、学びを深めることが困難なクールであった。ただ、今期の研究会テーマであったコロナ禍から学ぶことで、私たちが社会的な生き物であることも確信できた。すなわち私たちは生まれながらに、誰かと一緒にいること、経験や人生を共有することを強く望んでいることである。

今回社会的距離の確保が難しい状況を体験して、あらためて社会的距離を取ることは私たちに今後、誰かと一緒にいることがいかに重要であり、互いに触れ合うこと（握手やハグ、寄り添うことなど、私たちが人間に与えられている社会的な距離の近さを示すあらゆる行動）がどれほどすてきなことを、メンバーと再認識、共有することができた。

研究会で、ニューヨーク知事が記者会見での発言を紹介したことを報告する。「すなわち私たちは感情や個人的な考えではなく数値とデー

タに基づいて行動するべきであり、データが示すパターンは、私たちが何をどうすべきか決断することを助けてくれる。私たちは何よりもまず、データをみる必要がある。もっと早い段階から、そのようにしていればよかったのだろう。まずはとにかく、今何が起きているのかを理解することが必要だ」というコメントであり、我々がマグノリア・カフェ活動で大切にしている直接体験後の振り返りに対して考えさせられた。

また、今年度の研究会では、新型コロナウイルスについて、彼らからの多角的な視点での発題が行われたこともあり、例年通り、貴重な学びの機会を設定できたのではないかと評価する。今後の活動も引き続きサバイバルの知識・スキルを伝え、隣人と生き残るためのスキルを得る活動を学生たちと共に行っていきたい。今期もこのような活動機会が与えられたこと、また、参加してくれている学生たちと、共通体験を持ち、体験から得る学びを共有できたことに感謝したい。

(清水 幸一)



珈琲・ホビー・ハウス

担当教員：山中 雅大

カフェ活動の理念と概要

「寸暇を惜しんで勉強し、勤勉に働いて暮らしを立て直す」という二宮金次郎像に象徴されるような、「勤勉は善」「遊びは悪」という実利主義思想は明治以降、政治戦略により伝播されたイデオロギーである（現代の二宮金次郎像では「異なる思想（むしろレジャー寄り？）」をさらに定着させようと懸命のようだが）。勤儉力行や勤勉神話が定着していくことで、「娯楽（レジャー）」は仕事を中心にした個人の品格や生活を豊かにするための「教養」の機会や時間として捉えられるようになった。「役に立つ娯楽」といった合理的余暇の探求が「レクリエーション」として推奨・推進されていく一方で、「役に立たない娯楽」は「大衆文化・大衆娯楽」として低級文化と捉えられ批判の対象になった。日本において「レジャー」は「余暇」とも訳されるが、「余った暇」という副次的表現の定着からも些末な対象であることを示唆している。

「レジャー」の語源はラテン語の「リセーレ (licère)」に由来し、本来は仕事に従属しない独立したものとして「自由であること」を意味した。これに対応するギリシャ語は英語の「スクール (school)」の語源である「スコレー (σχολή)」であることから、自由にするものの中心には仕事とは直接関係のない、「純粋な好奇心に基づいて学び考えること」があったと言える。

本カフェでは、「娯楽（レジャー）」本来の意味である、「純粋な好奇心に基づいて学び考えること」を理念に、学生自らが積極的に主体性をもって活動することを主眼としている。特に、学生自身の興味関心の追究であれば、何をテーマにして

も「学習」と位置づけ、自発的な活動を受容し主体とした。よって、本校の学生に限らず、誰もが携わり愛好するであろう「趣味（ホビー）」を活動の中心に据えた。

マスプロ教育に代表されるような座学や単なる映像の視聴学習は避け、自分自身の興味関心を他者に説得的に理解し共有できるように、企画書の作成・立案、審議、プレゼンテーション、ディスカッション、そして効果測定（振り返り）のための評価シートの記入を基本的方針とした。つまり、課外活動でありながらもアクティブラーニングを根幹としているために、教員自らが「お膳立て」するような方針と実施はせず、教員の能動的関与度を下げることによって学生の主体性と積極性を促し養成した。その結果、2022年2月時点の本カフェの活動人数および企画数は、21人募り、12企画が今までに立案され、コロナ禍にも関わらず活発かつ積極的な活動となった（企画の内訳は、7企画を採用、3企画が不採用・辞退、2企画が延期・再検討となっている）。

上述の方針により、カフェの活動は、報告書に掲載される内容および日時のみに限らない。企画書の作成・立案や審議では、何度もブラッシュアップや建設的な批判が繰り返された末に、やっと「活動」に至る。苦心惨憺した企画書提出後のさらなる採用有無を中心に「活動」の有無が決まるため、「企画者」の根気や労力、入念な準備と多角的検討、自分自身の興味関心に掛ける熱量や達成力が問われる。また、「参加者」の関与意欲、建設的な批判力、積極性、共同性、カフェのメンバーであることの当事者意識により、企画の充実化が図られる。つまり、どちらが欠けても本カフ

エの活動は活発化せず、そもそも実施もされず、成立しないことを意味する。



第1回「時をかける少女」鑑賞会

それらの点を踏まえると、今後の課題も多い。まず、「純粹な好奇心」に傾倒しがちであり、学習面での探究や追究性に欠ける点が挙げられる。「楽しい」だけでは、単なる体験であり「学び考える」追究とは言えない。次に、学生の主体性を重んじるがあまりに、関与度合いや意欲において責任の分散が発生していたことが挙げられる。これは、本カフェが学生の参加について強制力を持たない「課外活動」であるという制度上の限界点とも言える。しかし、「企画者」および「参加者」の主体性にばらつきが目立ち、積極的メンバーと消極的メンバーとに分かれたのは、本カフェの主眼が十分に成就していなかったことを意味し、今後の反省点だと言える。

多くの課題や反省点を包括しながらも、2021年度における本カフェの活動は、学生たちにとって実りの多いものだったようである。「たこつぼ」的になりがちな「趣味」や「娯楽」をいかに、客観的に、そして協同的に、時に反駁・批判をし合いながら共有し追究するかは、旧来の「コーヒーハウス」に見るような公共的議論の場となることが望ましい。また、価値観や嗜好の異なる者同士による「文化」の混淆は、文化的オムニボア（雑食）の実践ともなる。その点において、マグノリ

ア・カフェという制度は、とても学生にとって有意義な教育機会だと言えよう。

活動の実態や本カフェの意義、評価については以下の学生のレポートを参照されたい。

（山中 雅大）

学年間を超えた場所とその関係性

カフェの活動が立案・承認されるためには、企画書を作成した後に審査を受け、カフェの合意がないと開催できない。私も4年生の先輩と共同企画で立案したが、企画書に対する改善点や意見が多く、何度も修正を行なった。本カフェの先生や先輩は1年生だからということに付度なく、意見や助言といった建設的な批判をしてくれる。そのおかげで企画書を作る技術や率直な意見を発言する力が非常に養われた。「学年間を超えて活動できる場所」であるからこそ、個性や長所を伸ばすことができるのが本カフェの特異性であると私は考える。

（大野 亜里沙）

カフェ（山中研）について良いと思うところ

私が個人的に良いと感じていることは、3つある。1つ目が、1～4年生および先生との壁がなく、カフェの活動に限らず気軽に集い、学習やディスカッションができるところだ。2つ目は、研究室の環境の良さである。本がたくさんあり、お茶やコーヒーを飲みながら議論をしたり企画を練ったりすることができる。何をすることも過ごしやすい。3つ目は、学生が主体で企画等をするところだ。私が加入した2021年12月にクリスマスイベントが行われた。その際も学生が主体で企画・運営をしていた。初めてイベントに参加して緊張はしたものの楽しく、色んな人と学年に囚われることなく交流を深めることができた。これらは他に

類を見ない本カフェや山中研の良いところだと思ふ。

(岩崎 布紗)

ゲー専で形成されるコミュニティ

大学祭で開催された「大乱闘スマッシュブラザーズ SPECIAL」と「マリオカート8 デラックス」の大会は、ゲームを介することによって形成されたコミュニティであった。私もその中の一人であり、そこでは時にデットヒートが繰り広げられていた。またある時にはプレーを褒め称えあっていた。単にゲームで盛り上がったと言えればそれまでだが、私は年齢も性別も生まれ育った環境も異なる者同士が一つとなつて、こうした場を作り上げたことにある種のエネルギーを感じた。ゲームを介することによって生まれる「公共性」は、娯楽でありつつも学習の場として知と協同のコミュニティとなつていたと思う。

(豊嶋 竜也)

時をかける少女について

本カフェ第1回の企画として取り上げた、2006年公開の細田守監督作品である「時をかける少女」は、興行収入としては2.6億円と総じて高くはない。理由としては映画が小規模公開であったことや、原田知世の作品を愛好していた層が中心であったことが考えられる。視聴した一個人としては、2006年という時代にしては映像が美麗であり、構図も面白いものであると感じた。一方、作品の展開や起承転結についてはあまり納得できない要素もある。カフェ活動として皆で「突っ込むことができる」作品の考察、検証、ディスカッションは大変面白いと感じた。

(村井 亮太)

ホビーの共有で知見を深める

このカフェの企画は「時をかける少女・少年・おじさん～胸アツ&胸キュンの『あの頃』を思い出して～」という題目で映画鑑賞した後、映画の考察やただの消費者では終わらないためのミニ講義および論評を行った。一方、大型企画であるフォレストアドベンチャーは自然の中をジップラインで駆けるという初回とは大きく異なる企画だった。しかし、どちらも「珈琲・ホビー・ハウス」の名の通りホビーを存分に味わいながらもコーヒーハウスとして、情報を交換し知見を深めることに繋がっている良い活動だった。

(松本 臣)

カフェ活動に参加して

私は2回生になるまでカフェ活動というものを知らなかった。友人からの誘いで「珈琲・ホビー・ハウス」を知り、カフェ活動に参加し始めた。「珈琲・ホビー・ハウス」では、学生が主体的に企画を立て、その企画をメンバー自らで審議するため、企画の立案時から多くの議論が成されている。そのおかげもあり、先輩後輩とも仲良くなることができた。今まで参加した企画も、皆が仲良く楽しんでこられたと思う。来年度も、皆で沢山企画を立て、皆で忌憚のない意見出しを行い審議し、より良いカフェ活動にしていきたいと思っている。

(建部 孝明)

クリスマス企画立案を通して感じたこと

私は、後輩と共にクリスマス会を企画、運営した。企画立案の効果として、予算の分配などの普段の大学生活ではあまりできない経験を積むことができたことが挙げられる。加えて、企画立案後は積極的に企画に参加するようになったこと

も効果と言えるだろう。

また、企画運営の副次効果としては共同企画者のメンバーと連絡を密に取るようになったことで、企画以前より仲が深まったことが挙げられる。その結果、カフェ外でも議論を交わし合うようになった。クリスマス企画立案は私にとって、本カフェでの活動で積極性を促し、稀有な経験を積むことができた良い学習の機会であったと言える。

(吉田 真由美)



第6回 フォレストパーク企画

とても楽しかったフォレストアドベンチャー

高知県にフォレストアドベンチャーがあることは知っていた。しかしながら、実際にフォレストアドベンチャーに赴く機会は今までなかった。今回カフェメンバーとの課外活動を機にフォレストアドベンチャーへ赴く事が出来た。事前に知っていたアスレチックを実際に自分で体験すると、恐怖心の中にも「楽しさ」が垣間えてとても楽しかった。「遊び」や「娯楽」について、メンバーと体験的に学習でき、そのこと自体も「楽しさ」となった。

(前田 翔哉)

カフェ活動に参加して

カフェ活動の一環として、高知県の「フォレストアドベンチャー」に参加した。久しぶりの県外、そして久しぶりに大勢の人たちと外で体を動かした。まず思ったのは、一人では絶対に全てのアトラクションをこなすことは無理だということだ。というのも、アドベンチャーのほとんどが落ちたら即死なほどの高所で、足場も不安定だったので、私はビビり散らかしていた。団体での活動だったからこそ、私は頑張れたと思う。また、普段話さない人ともアドベンチャーを通してコミュニケーションを取ることができた。この活動は、私にとって協同行動を学習する意味でも有意義なものとなった。

(田代 遥)

マグノリア・カフェの活動を振り返って

私は今年度の「珈琲・ホビー・ハウス」でたくさんの方の企画に参加した。「時をかける少女」や「ハリー・ポッター」の映画鑑賞では家での視聴とは異なり、社会学やメディア論の観点から分析的に視聴ができた。初めて作品の背景や文化性について考え、内容分析についても知ることが出来た。

しかし、カフェには改善点がある。まず個人の改善点は、企画を立案せずに終わってしまった点である。来年度は、企画を立てることを目標にしたい。全体の改善点としては、参加メンバーの固定化である。他のカフェよりも比較的多くのメンバーがいるのに交流が固定化していた。人が多くなると日程調整は難しくなるため「参加したいけどいけない」ということがおき、関与度の減少から「別に参加しなくていいや」というスタンスの人が増えていったように思う。マグノリア・カフェ自体は気軽に参加できるシステムで素晴らしいため、来年度はもっといろんな人が参加し交流

できるようなカフェ活動を目指していきたい。

(依光 駿人)

ハリー・ポッター視聴会の企画

今年度のマグノリア・カフェでは、「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」視聴会を企画した。「ハリー・ポッター」シリーズには映画と原作の小説があり、両者には内容に差異がある。その是非を問うために企画したのがこの視聴会だ。1回生から4回生までの5人が集まり映画を視聴した。そのあと私が議題に関するプレゼンテーションを実施し、議論を行った。視聴者を楽しませるためにより演出方法に合う描写に作品内容を変えられることがある。文章で映える描写、映像で映える描写は異なるため、その具体的なシーンなどについて議論を深め、一人では意外な考察を共有した。とても良い活動となった。

(横山 菜乃)

対話からの学び

私は「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」視聴会に参加した。視聴後のメンバーとの対話を通して、一人で観た時よりも理解が深まり、自分が気づいていなかった着眼点や疑問を新たに得られた。作中の差別をあえて追求しないことで、世界に公開される映画として成り立っているのではないかという考えが特に印象に残った。作中には種族や血統による差別描写が多く登場する。それらはそのまま白人至上主義など現実世界で起きている問題にも繋がる。ファンタジーだとしても迂闊に踏み込まないところに制作側の視点や意図が見え隠れする。作品を多角的に分析・考察する深い経験と学習になった。

(松岡 瑚々呂)

アンチ・ホモ・エコノミクス

「珈琲・ホビー・ハウス」では様々なホビー(趣味)をテーマにコーヒーハウスのような対話や議論、考察を深める場として、学生主導の積極的活動を実施した。各種のホビーに対して仮説を立て、メンバーで場を共有し実施することにより、ホビーに対する多角的な考察や分析を試みた。

活動を通じて、コロナ禍対策による合理的活動の加速に対し、ホモ・ルーデンスやホモ・フェーベルの視点を模索するような文化的活動やクリエイティブな活動を、今後のwithコロナ社会では保護し、試行錯誤していく必要性を感じた。そのためには、実利主義的思想ではなく、遊びのある純粋な興味関心や好奇心の対象(ホビー、レジャー)の追求と分析が肝要だと思った。

(保科 太志)

新しい経験と発見

残念ながら今年度は積極的な参加は叶わなかったが、研究室において先生や他学生との会話を通し新たな発見や価値観の共有を行うことができた。また自身で企画を考え、それを実現するために説得的な企画書を作成する作業は初めての経験であった。初めての作業に戸惑いもあったが他学生のものを参考にしつつ、先生の指導の下、無事に企画書を完成させることができた。立案企画(某アニメシリーズの視聴によるジェンダー・フェミニズムの探究)の開催は昨今の状況を鑑みて来年度に延期することとなったが、無事に最後まで責任を持って携わるつもりだ。

このカフェでの活動をより有意義なものとするため、今後はより意欲的な参加を目標としたい

(川添 美卯)

「ハリー・ポッター」鑑賞会 活動レポート

「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」鑑賞会では、原作小説を読んだうえで映画鑑賞を行った。その後、メディアでの差異を確認・共有し、メディア・ミックスによる変化の内容について議論を行った。

今作は他の作品より差異が多い。映画では「屋敷しもべ妖精解放戦線」の話が丸ごと削られている。それに伴い屋敷しもべ妖精は一切登場せず、重要人物も置き換えられている。これは映像メディアとして世界に露出する場合の、倫理や情勢に伴って重要人物の置き換え、内容の変更が行われたのではないかという結論に至った。一見、手垢が付くほどに大衆化している作品であっても、それぞれによって見方や捉え方が異なることが鑑賞会で共有された。また、異なる人々によるディスカッションは新たな知見と見解を広げる好機だと言え、有意義な活動であった。

(木村 朱里)



第9・10回 クリスマス合同企画



第3回 「ハリー・ポッター」鑑賞会

2021年度 珈琲・ホビー・ハウス活動カレンダー

年月	企画内容など
6月	30日/マグノリア・カフェ申請書提出
7月	6日/マグノリア・カフェ開設に伴う会議@研究室 7日/マグノリア・カフェ発足、大学祭出店内容相談(7月14日資料提出用) 20日/「時をかける少女」鑑賞会企画実施 21日/ハリーポッター企画のためのアンケート調査実施
8月	
9月	12日/大学祭打ち合わせ@721教室 22日/VR企画立案 24日/VR企画が立案者の取り下げにより正式にボツとなる
10月	9日/「ハリーポッターと炎のゴブレット」鑑賞会企画実施 30日/大学祭前日準備 31日/大学祭
11月	22日/フォレストパーク企画実施 23日/ROUND1企画実施
12月	1日/『salterrae』掲載のための打ち合わせ 3日/四国村企画立案 7日/キャンプ企画、忘年会企画、「少女革命ウテナ」鑑賞会企画立案 9日/キャンプ企画、忘年会企画が立案者の取り下げによりボツとなる 21日/クリスマス企画、珈琲・ハウス企画実施
1月	14日/尾場瀬先生のカフェとの合同企画のためのアンケート実施 28日/カフェフォーラムのための動画作成
2月	3日/まん防発令のため「少女革命ウテナ」鑑賞会企画が延期となる 3~10日/マグノリア・カフェ年間レポート作成

おたく♪シンフォニア

担当教員：川又 実

おたく♪シンフォニアのバックグラウンド

現代、世界共通語になった「おたく（オタク・OTAKU）」。おたくには「お宅」や「ひきこもり」などのイメージであるが、社会的に認知されつつあり、趣味に没頭、熱中している人を指す。「おたく」を自称し、自分の世界を楽しむ若者も多くいる。つまり彼らは独りになり、心が落ち着くというような状態「個独」を楽しんでいる傾向もあるのではないだろうか。若者のおたく化を学生と一緒に考えていくことは、彼らの人間関係を考えるうえでも、コロナ禍における現代社会への問いかけになるのではないだろうか。

おたく♪シンフォニアが奏でる問い

おたくは未来を救うのか？ 主宰者はその可能性はないと考える。ただ若者たちと日々接していると、その可能性もあるのではと思うこともある。なぜなのか？ これまでのPMカフェ活動でも「メディア」を中心に、そのメッセージや効果、社会や人間関係など、様々な可能性について学生と共に考えてきた。さらにここ数年は「個独」をキーワードに、特に若者の人間関係について学生たちと一緒に考えてきた。ますますメディアがパーソナルに進化していく現代社会において、社会とは無関係に個独を邁進していく「おたく」について考えることは、コロナ禍後に起こるべく社会変動に対し、自己の存在意義、あるいは現代社会の在り方についても一石を投じることができるのではないだろうか。

(川又 実)

【活動の一コマ】



「おたく♪シンフォニア 活動に参加して」

今から遡ること3年ほど前、2019年12月初旬、中国武漢にて発症例が報告されて、またたく間に世界中でパンデミックとなった、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行は、日本国内においてもその影響を受けたことは周知の事実である。このマグノリア・カフェの活動とて例外ではない。あらゆるものが否応なく涙を飲んで活動制限等を受けるなかで、心臥せること忘れて、趣味に熱中没頭し図太く生きるのが「おたく」の人々である。

今年度も当初は、2011年に高知県西部に位置する四万十町に出来た、フィギュア好きには堪らない「海洋堂ホビー館四万十」などを始めとした、おたく文化と縁深い施設などへの遠出も視野に入れて、4回生3名、3回生1名の計4名の学生が集い活動を開始したが、コロナ禍を配慮して、活動場所の大半は、当マグノリア・カフェ主催者である川又実研究室となった。研究室という限られたスペース内でも、十二分に楽しむことができるのが、サブカルチャーである。数あるサブカル

チャーのなかでも、今回、スポットを当てたのが「映画」や「テレビ番組」といった「映像文化」だ。参加学生には、公開されて何十年と時が経てもなお、映画史上にその名を刻んでいるような「名画」、往年の「銀幕の世界」を愛する者や無類の「昭和の流行歌」好きという稀有な者などがいた。したがって、彼らの持ち込み企画で、ジェニファー・ジョーンズ主演の『慕情』、近年ヒットした『君の名は。』に対抗して『君の名は』(岸恵子・佐田啓二主演)といった映画作品を鑑賞したり、「なつメロ」の宝庫とも云うべきテレビ東京が放送していた、「なつかしの歌声」に残る貴重な歌唱映像などに触れるなどしたりした。これらによって、「ビデオ」という名の小箱の中に刻まれた“歴史の一片”に接し、故人となって久しい、往年の名俳優、名女優、名歌手たち、あるいは、いまなお現役で活躍しているアーティストの若かりし姿に思いを馳せて、若人たちには、呼べども逝にて再びかえり来たらぬ古(いにしえ)の幻に触れる佳き機会となったと思われる。

以上のような、やや「おたく」を飛び越えて、マニアックな世界に足を踏み入れてみた訳であるが、参加学生に名を連ねる学生たちが、卒論執筆作業などを抱えた多忙なスケジュールのなかでも、研究室に足を運んでくれた事実を見れば、その事実がすでに「おたくが織りなす交響曲(シンフォニア)」であったともいえるであろう。

「『おたく』は未来を救うのか?」ということが、当マグノリア・カフェの最大のテーマであるが、「おたく」自体が未来を救うことは容易ではないであろう。だが、しかし、一つ述べられることには、「おたく」が熱中、没頭する対象物が、コロナ禍という名の困難な現代を生きる我々を救うことは不可能ではないと信じたい。

(社会学部 4年・恒石 裕也)

「川又先生ありがとう」

昨年同様コロナ禍の影響で、外での活動はあまり出来なかった。研究室に集まり今後の方針について話し合うなど、こぢんまりとした活動が多かったため、少し物足りなさを感じた。それでも川又先生が淹れてくれた美味しいコーヒーと、お菓子を食べる時間は至福のひとつきだったと感じる。しかしブラックコーヒーはまだ得意ではないので、これから飲み続けるうちに好きになりたいと思う。

今年の活動で印象深かったのは、大学祭の参加だ。2年振りの大学祭の出展である。「カフェあなば」として珈琲の販売であったが、出展場所が悪かったせいか、売上げは例年の半分以下であった。これもコロナの影響か。しかし、他のカフェに参加している学生たちと記念写真を撮ったりと、短い時間ではあったがそれなりに楽しめた、学生最後の大学祭であった。

約4年間、川又先生主宰のカフェに参加してきた。同僚の森田さんは、韓国留学へ行ってしまったが、私が卒業後も是非活動を続けて行って欲しい。やはり学外での活動、特に徳島でのラフティングが一番の思い出ではあるが、後輩たちにも是非アクティブなシンフォニーを奏でて貰うためにも、活動を継続して行って欲しい。

川又先生、この4年間本当にありがとうございました。

(文学部 4年・池内 瑞紀)

「来年の活動楽しみにしています」

今年の活動は、夏休みから韓国留学をしているため、ほとんど参加することが出来なかった。でも来年、留学から帰国したら再度カフェ活動に参加したいと思う。

先生、それまで活動を継続して行って下さい。

韓国より。

(社会学部 4年・森田 知世)

カフェ総括コメント&評価

2021 年も引き続き、猛威を振るうコロナウィルスのなかで、カフェ活動をどうしていくか、毎回試行錯誤の連続であった。特にカフェ活動の中で、活動の中心でもあった「食を共にする」ことや、学外での活動の制限があったりと、なにかと思い通りに活動が出来ないなかで、学生たちと如何にコミュニケーションをとっていくのか、色々と考えさせられた一年でもあった。

昨年度に引き続きカフェ名を「おたく♪シンフォニア」と称したのは、コロナ禍においても、若者へ未来を託す願いからであった。未来を創造していく若者達、つまり「おたく(あなた)」達が、これまでの日常が非日常となる日々において、一緒に共に音を出し合いながら、日常化しつつあるこれからの社会について、一人一人が「言葉」を奏でながら、この日常についてどう考えていくのか、交響曲というシンフォニアの可能性を、少しでも開花させたいという考えからである。

これまでの PM カフェ活動でも「メディア」を中心に、そのメッセージや効果、社会や人間関係など、様々な可能性について学生と共に考えてきた。さらにここ数年は「個独」をキーワードに、特に若者の人間関係について学生たちと一緒に考えてきたうえで、ますますメディアがパーソナルに進化していく現代社会において、社会とは無関係に個独を邁進していく「おたく(あなた・他者)」について、真面目に考えることは、今後起こるべく社会変動に対し、自己の存在意義、あるいは現代社会の在り方についても一石を投じることができるのではないだろうかと考えたからだ。

「外出制限」「三密回避」など、他者との接触を遮断することが流布された社会になり、皮肉にも「Stay Home」と叫ばれた社会へと変化し、多くの人が何処へでも自由に出かけることが制限された社会で、「引きこもり」とスティグマを押され、その代表例としてあげられていた「おたく」が、お宅に留まり、これまで通りの生活を送り、そして社会を静観していた。

そして「Stay Home するのが、何故ストレスなのかはわからない。社会が変わっても、我々はこれまで通りの日常を続けるだけ」とある学生が主宰者へ伝えた一言は、社会のあり方が、如何にマジョリティ的思考で構築されているか気づかされた。如何に平常時の常識、認識にとらわれ、我々はこれまで生活してきたのかを。つまり日常とは何かという問いを突きつけられる中での活動の一年であった。

思い通りに活動を展開できないことは、多少のストレスであり、気持ちが凹んでいる学生たちの顔を見ていると、このまま活動を続けていても意味がないのではと脳裏をよぎることもあった。しかし、ずっと一緒に活動に参加してきた恒石、留学した森田、そして就活を頑張って自信の未来を切り開こうとしている池内は、思い通りに活動が展開できない制約された活動の中でも、積極的に参加してくれた。

主宰者自身も、コロナ禍の社会で昨年以上に公私共々々と大変な一年であった。だから、指揮棒を振るうはずの指揮者(主宰者)が、演奏者(学生)をまとめ、上手にシンフォニーが奏でることが、思い通りに実行出来ない状況であったかも知れない。しかし、そんな中でも活動に参加してきた学生たちとコミュニケーションをとる中で、学生たちから前向きでポジティブな考えや柔軟な行動、そして趣味にいたる話まで色々話すこと

ができ、積極的な活動をすることは、色々と難しい状況下のなかでも、これまでの活動とはひと味違った経験を、彼らを通して実行できたと考える。

最後に、主宰者として毎回試行錯誤の連続ではあったが、本年度の活動でも一番勉強させられていたのは私自身なのかもしれない。「おたく♪」的活動も最近は、じっくりと考えることが出来る時間である、居心地がよくなっている自分が、正直現れている。しかし、これで本当に良いのか？ まだまだ課題が残るが、最後に活動を共にした学生たちへ感謝の意を伝えたい。

(川又 実)

【活動の一コマ】



インプロを生きる。

担当教員：仙石 桂子

わたしたちの活動

インプロ（即興演劇のこと。以下、インプロと言う。）の理論家であるキース・ジョンストンは、インプロの理論家になる前は劇作家であった。インプロのゲームなどは、小難しい、調和できないアーティストたちをまとめるために始めたものである。私自身、17年ほどインプロを学び、ワークショップやショーを行ってきた。ただ、昨今の自己啓発的になりがちなインプロを見ていると、いつまでも自分の中にインプロへの好意的な気持ちだけにはなれないものがある。ただし、インプロの中のストーリーテリング、そして台本を創る際にもインプロの理論はとても有効的である。

また、筆者が台本の芝居をするメンバーはほとんどがインプロをやっているメンバーである。その際に、インプロをしているからこそその台本芝居の中での俳優としての能力の向上につながり、様々な役ができるようになるのではないかと考えており、稽古中や本番中に何があっても適応でき、本人主体で芝居を創ることができることができていると感じている。

ここで筆者の専門のインプロの説明を行う。絹川（2002）は、インプロの定義を「インプロとは、既成概念にとらわれないうで、その場の状況・相手にすばやく柔軟に反応し、今の瞬間を生き活きと生きながら、仲間と共通のストーリーをつくっていく能力のこと」であると述べている。また、ヴァイオラ・スポーリン（2005）はインプロについて「誰でも演じることができ、即興演劇は、（才能ある生徒）と同様に（平均的な生徒）にも教えることができる、直感的知識に到達するための手段である」と述べ

ている。つまり、「インプロ」とはその場の状況・相手にすばやく柔軟に反応し、仲間と共通のストーリーが作れるようになることであり、直観的知識に到達するための手段であると言える。

活動報告

マグノリア・カフェ『インプロを生きる。』の活動は、春学期・秋学期・冬学期ともに水曜日の19時～20時半でダンススタジオやプレイルームで行われた。その時ごとに、大学祭に出演するメンバーや、丸亀市のにじいるカフェに出演するメンバー、学寮のクリスマスイベントに出演するメンバーなどで集まったりする場合と、全体でインプロの理論を学び、その後、ストーリーの作り方を学び、ショーイングとしてどう見せるかの練習を行った。

アイスブレイクではインプロが初めての学生もいたので、全体や、2人から3人組に分かれて連想ゲームを行い、その後、2人から3人組でインプロにおけるCROWを考える。CROWとは、インプロのストーリーを作る上の基本であり、プラットフォームの部分で、「C」はキャラクター・登場人物（Character）、「R」は関係性（Relationship）登場人物同士がどのような関係かということ、「O」は目的（Objective）登場人物が何をしていて、これから何をしようとしているかということ、「W」は場所（Where）、ここがどのような場所であるかということ、という4点を表す要素の頭文字である。このCROWがインプロのシーンを作る上でしっかり決まっていると、そのシーンは成功する確率が高いと

言われている。高尾（2012）は、プラットフォームについて以下のように述べている。

「プラットフォームではゆっくりと時間を使います。何も起きなくても、お客さんは不満を感じることなく見えています。舞台上になると、とたんに何か言わなきゃ、何かしなきゃと焦ってしまいますが、急いで何かを言ったりしたりする必要はありません。舞台上は客席よりも時間が速く流れていますので焦ってしまいがちです。しかし、もし冒頭の部分で焦っているいろんなことを言ったりやったりしてしまうと、安定したところがありません。」

CROWのあとにTILTという物語の「傾き」も決めてシーンを作成することにした。この際、高尾（2012）はTILTについて以下のように述べている。

「美術が色の芸術で、音楽が音の芸術だとすると、演劇は関係の芸術といえると思います。人は関係が変わるのを見るために演劇を観るものだともいえます。（中略）プラットフォームでは、お客さんはゆっくりと見てくれています。そして、見ながらそろそろ何か起きるだろうと思っています。そして何か起こるか予測をしています。演劇は安定と変化からできています。ゆっくり丁寧に安定をつくったら、ここで何か変化を起こす必要があります。そして、変化が終わるとまたそこで安定して、しばらくしてからまた変化して、というふうにしてドラマは進んでいきます。安定したのをしばらく見て、それが変化をするのを見るのが、私たちはものすごく好きです。だから、人はドラマを二時間も三時間も観ることができます。」

インプロのストーリーの作り方の基本である、CROWとTILTを徐々にストーリーの中に入れていき、最後に終わりを見つけることを基本

的な練習の構造にした。毎回ペアを変え、様々な人と学年を越えてシーンを試みる。相手を陥れたり、相手に怒ったり、相手の言葉に反応して泣いたり笑ったりしながら、相手の動き、セリフを見て、「いまここ」に何が必要で、どんな風にこの相手と遊べるのか、を模索していく。そして、シーンが終わったあとには必ず二人で振り返る。自分の「つもり」と相手の「つもり」の違い、そして、こういうことがあったらもっと興味深くなったかもしれない、など、シーンを行った後の対話こそ、インプロの醍醐味とも言える。

今までの高校演劇の中で、「即興」に苦手意識をもつ学生はとて多い。それがどうしてなのかと言えば、ただ即興で芝居をしろ、ということほど怖いことはない。そこで、このCROW、TILTを学ぶ必要性は、みんながストーリーを作る上での共通認識があることによる安定と、「自由すぎないこと」の自由を体験できると考えられる。インプロのシーンを作る中の「自由すぎることの不自由」について、高尾（2012）は以下のように述べている。

「オスカー・ワイルド*は『自由は創造性の敵』と言っていたそうです。自由になんでもやっていると、逆に何をやっていいかわからなくなって不自由になる。でも、ある制約が与えられると、その中で何ができるだろうと、かえっていろんな発想が浮かんできたりする。その意味ではインプロのゲームは創造のための制約です。」

考察

今年度のマグノリア・カフェでは、1年生の参加が大変多かった。「インプロ」に初めて触れ、「なるほど」と頷いたり、笑ったり、主体的に、

学ぼうという姿勢があった。また、コロナ禍の中で思うように公演ができない時期に、「その場でショーイングにできること」であったのは大きいことであったのかもしれない。俳優としての能力の向上まではいかぬとも、「即興嫌い」に関しては改善できる機会になったのではないかと考える。

(仙石 桂子)



インプロのゲーム「スイッチ」の稽古をしている様子

学生からの言葉

私が思うインプロの魅力は、表現力や想像力を広げることができるという部分ではないかと考えています。台本のない中で芝居をすることは難しいですが、いいアイデアが不意に生まれた瞬間はとても嬉しくなります。また、インプロで得たものを今後の自分の表現に活かすこともでき、自

身の可能性を広げることに繋がります。

さらに、インプロは演劇をしている人に役立つだけでなく、コミュニケーション能力を高めることが可能です。コミュニケーション能力は、将来どんな職種に就いたとしてもなんらかの形で活用することができます。

このように、インプロではただ演劇的な表現をするのではなく、自身で考えながら想像力を膨らましていくことによって、多様な力を養うことができます。そして、インプロによって得たものを活かすことで、自己のスキルアップにも繋がると考えられます。

(社会学部 1年・佐伯 悠一郎)

*アイルランドの作家、詩人、劇作家。代表作に『サロメ』『幸福な王子』など。

参考文献

- Johnstone, Keith, 1979, *Improv: Improvisation and the Theatre* (三輪えり花訳, 2012, 『インプロ 自由自在な行動表現』而立書房.)
- Spolin, Viola, 1963, *Improvisation for the Theater* (大野あきひこ訳, 2005, 『即興術 シアターゲームによる俳優トレーニング』未来社.)
- 高尾隆・中原淳, 2012, 『インプロする組織』三省堂.
- 高尾隆, 2006, 『インプロ教育:インプロは創造性を育てるのか?』フィルムアート社.
- 絹川友梨, 2002, 『インプロ・ゲーム』晩成書房.
- Lobman, Carrie and Matthew Lundquist, 2007, *Unscripted Learning: Using Improv Activities Across the K-8 Curriculum* (ジャパン・オールスターズ訳, 2016, 『インプロをすべての教室へ』新曜社.)

現代ソーシャルワーク研究会

担当教員：北川 裕美子

活動の背景

ソーシャルワーク実践においては、複合的課題を抱える事例に対して、分野横断的に支援を必要とする人々を取り巻く環境や地域社会に働きかけ、多様な社会資源を活用・開発していくソーシャルアクション機能がますます必要になってきている。にもかかわらず、現在のソーシャルワーカー養成課程においては、ミクロ領域での実践、スキルや技術重視教育に重きがおかれているように感じる。そこで、ソーシャルワーカーを目指している次世代を担う本学学生が、「本人の努力、しくみ、既存の制度だけでは解決できないような問題」に対し、どのように向き合えば良いか、学生時代にできる可能性等について、ディスカッションをしたり、あるいは現代における社会福祉学について理解を深める機会をつくることにより、単なる国家資格取得だけでなく、社会問題に対し多角的な視点でとらえ、適切な支援を見立てる力を養うことにもつながると考えた。



勉強会の様子

ソーシャルワークに関する勉強会の開催

今年度は、主に秋学期と冬学期に、今年度社会福祉士・精神保健福祉士国家資格受験を予定

している4年生を対象にソーシャルディスタンスに十分配慮をした上で実施した。参加した学生からは、育児休業制度に関する議論があがった。現在の制度では、原則子どもが1歳になるまで育児休暇を取得でき、要件を満たせば最大で2歳になるまで取得できる。また、両親共に取得する場合は、原則1歳2か月になるまでに最大1年取得することができ、さらに育等の理由によっては両親ともに取得する場合も2歳になるまで延長できる。しかし、インターネットや参考書等によっては、その旨の説明が不十分で分かりにくく、適切な情報が必要な人に伝わっていないのではないかと議論がなされた。ただし、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、これまでに実施してきたような様々なことについて自分たちで調べたり、議論する時間を確保することが難しかった。

コロナ禍以前は、合宿形式による学生同士が議論を展開する機会を実現することができた。また、週に2回の頻度でカフェを実施することもできていたが、今年度は月に1回週末に実施する程度に終わってしまった。今後は対面という方法だけでなく、オンラインでの開催等も視野に入れた上で、次年度は開催頻度を増やし、ソーシャルワークに関する制度設計や課題などについてディスカッションを行っていききたい。

子どもの居場所支援を通じた学び

子どもの居場所支援を実践している NPO 法人と協力し、冬休みの宿題応援や昼食の提供をする

活動にボランティアとして参加した。参加した学生はみな子供たちの勉強を教えたり、一緒に昼食を作るなど、積極的に参加していた。このような活動は、PM カフェの頃からも行っていたが、子どもたちとかかわりを持つ学生が、コロナ禍における子どもの居場所支援のあり方について卒業研究のテーマとして取り上げることとなった。子ども食堂を実践している数団体にインタビューをするなどした結果、「子どもの貧困対策」、「親子の居場所」、「つながりの継続」に関する課題が見えたとのことであった。このように、自らが実践現場に入り活動を行うことで、新たな課題等を見つけ探究する意欲の向上にも繋がったのではないかと考える。

今後も机上だけの学びではなく、実践の中に身を置くことによる気づきを促していけるような活動を行っていきたいと考える。

(北川 裕美子)

参加者の声

カフェで学生や先生と深く話をする機会を持ちました。これを通して、ソーシャルワークについての学びを深めることができましたと思います。

(社会福祉学部 4年・藤井 進太郎)



勉強会の様子



プログラミングを体験する子どもと学生



ソーシャルディスタンスで食事をとる様子

ポピュリズムとヘイトクライム

—新自由主義思想と社会の分断を背景にして—

担当教員：尾場瀬 一郎

わたしたちの活動課題と問い

1980年代以降、世界は大きく変貌しつづけている。ひとつは、冷戦終結とグローバリゼーション、IT化である。もうひとつは、アメリカのレーガン大統領から始まる新自由主義的な政策の諸国への波及である。あらゆる領域への競争原理の導入、大きな政府から小さな政府への転換（緊縮財政）、自助イデオロギーの普及などが行われた。その過程のなかで経済格差が拡大し、それが教育格差など諸格差へと連鎖していき、それと同時に並行する形で社会は分断され、人々の間に不安や孤独、怒りや無力感などが醸成されていった。

本カフェの目的は、格差の拡大そして社会の分断の過程と、ポピュリズム・右派勢力の台頭やヘイトクライムの増加とが、どのような因果関係にあるのか、また、マイノリティや社会的弱者にたいする暴力的言動・排斥やナショナリズムが人々のメンタリティのどのような側面に訴えかけるのか、大衆心理の内在的理解を軸にして分析を進めることにある。

さらなる学習活動としては、日本だけでなく、アメリカやヨーロッパのポピュリズムやヘイトクライムについての基本的な文献を読むこと、それから諸地域を比較しながら、ポピュリズムやヘイトクライム発生の原因がどこにあるのか、それが社会の分断や諸格差の拡大とどのように関係しているか、検討を重ねていくことを目的としている。別にフィールドとして、大阪生野区の人権団体や関係者などを訪ね、大阪におけるヘイトスピーチや民族差別の実情について、理解を深めることにある。

(尾場瀬 一郎)



濱渦くんを迎えて

テーマの深まりと比重の移動

本カフェは入学したての1回生が主体なので、まず経済格差の実態を理解することに努めた。そのため井手英策『18歳からの格差論』（東洋経済新聞社 2016）を共通のテキストとし、それを読んできてそれぞれの関心と立場から、感想や意見を言いあうことから始めた。

各人がヘイトスピーチや人権問題について認識を深めていく過程で、私たちは、経済格差は確かにさまざまな格差のベースになってはいるが、それだけでは社会の分断や人間間の深い対立、ある特定の集団や人物に向けられる憎悪表現・行動は説明できないのではないか、という考えを持つようになった。

言いかえるならば、それまでは経済資本を中心に考えてきたのだが、そこに文化資本やさらに社会関係資本という概念を加えないと、現代の複雑な社会現象や分断の諸相をより深く理解することができないということがわかってきた。メンバーの間で、経済格差から直接ポピュリズムや社会の分断を議論するのは乱暴ではないかという、共通認識ができあがったのだ。私たちがこのような

認識を深めていく途中で、活経済格差やその政治領域への影響に関心をもつ、2回生の濱渦憲伸がカフェのメンバーに加わった。このこともまた、カフェのテーマに広がりや深まりをもたらした。

以下、私たちがその後頻繁に使うようになり、共有の概念となった文化資本と社会関係資本の定義を記しておく。

1 経済資本とは

- ・親の年収や所得や経済力など、その人が持つ金銭力（お金持ちか貧乏かということ）
- ・1990年代以降、日本でもアメリカでも経済格差が拡大している

2 文化資本とは

- ・フランスの社会学者、ピエール・ブルデューが提唱（『ディスタンクシオン』）。知識・教養、自分から勉強する習慣、クラシック音楽や絵画の鑑賞力、美味しい・不味いを区別する味覚など。目に見えない資本（その人が家庭生活のなかで自然に身につけたさまざまな能力、エチケットや身のこなしなど、目に見えない資本）
- ・経済資本が豊か→文化資本が豊か（→社会関係資本が豊か）

3 社会関係資本とは

- ・アメリカの社会学者、ロバート・D・パットナムが提唱（『われらの子ども』）。善意や共感に基づく個人間の信頼関係という資本（豊かで多様な人間関係をもっているかどうか・子どもたちがリーディング・モデルとして依拠することができるような人物が身近にいるか否かなど）
- ・ソーシャル・キャピタルともいう

今後、社会関係資本を分析枠組みとして利用す

るため、パットナムの『孤独なボーリング』や同『われらの子ども』で展開されている概念を精査していくことが、今後の課題となるだろう。そのため次には、私たちがこの一年理解に努めた、経済資本と文化資本との関係について概略する。

（尾場瀬 一郎）

経済格差と文化資本格差、自己責任論

以下のものは、文学部3回生の関まどかが、井手英策『18歳からの格差論』や吉川徹の『学歴分断社会』、ブルデューの『遺産相続者たち』などを読み、メンバーと議論していくなかで作成した報告だ（*以下の構図は、メンバー間で共有されている）。

◇ 経済格差、学力格差、地域格差、スポーツ格差、男女格差、年代格差、学歴格差、グループ格差、コミュニケーション能力格差……挙げればキリがない程様々な単語と結び付く「格差」

「格差というのは、ある指標の分布のばらつきの大きさ（差の状態）を意味している」

（吉川 2010: 79）

◇ 「不平等」の図（図1参照）

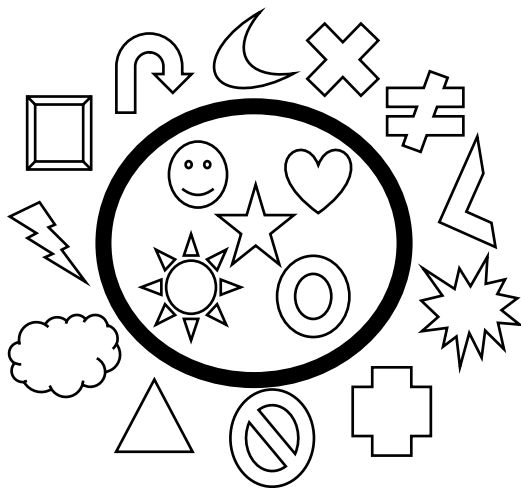
*「不平等とは、格差を発生させる因果的なしくみを意味する」（吉川 2010: 80）

もし、恵まれた人々が不平等論を否定する一方で、不運若しくは自分自身の在り様に納得出来ない人々が社会に責任転嫁してしまうことがあるとするならば、深刻な「分断」を招く結果となる。

弱者の救済は、彼らを「得をした人」にする一方、中間層や富裕層をハッキリと「負担させられる人」にしてしまうのです。自己責任を果たしていない怠け者に税金をとられるのはまっぴらごめんだ、そんな叫びがこだまするようです（井手 2016: 80）。

井出 (2016) の一文、まさに裏面を言い表したように感じるのかもしれないが、世の中において表面上の振る舞いだけが全てでは無いはずだ。特に、自己責任論者は批判される世の中だとしたら、社会的弱者を助けるべきだという風潮が正解の座にあるとしたら、自分自身の利益しか考えない発言は恥ずべきだと誰もが思うはずである。だが、その一方で表には出さなくても自分と他者の間が不平等であり自分自身ばかりが負担させられていると感じずにはいられないこともあるかもしれない。

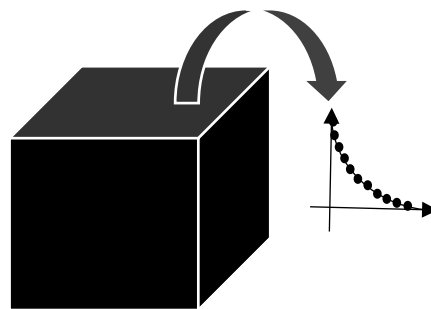
◇人を測り、階級付ける物差しは非常に人為的なもの



文化資本金格差、それはある特定の文化のみを優遇し、それ以外を周辺化することにある。
 周辺化された文化は軽視され、好ましいとされた文化に少しでも近づくようにと制度が駆り立てる。
 好ましいとされた文化を身に付ける程高い地位に身を置ける仕組みが階級を構成し、格差となる。

この世界には／数え切れない／たくさんの／ものさしがある／わずかな／幾つかのはかり方で／価値を決めつけちゃ／いけない
 (Great Power)

Great Power、最も初めに聴いたのが高校の合唱部で参加したとある中学校の体育館で開催された音楽祭であった。小学生ぐらいの時は学校以外の行き場を知らず成績とかどれだけ試験で点数が取れるかで自分自身の全てを測られるような錯覚をしがちだが、きっとそんなことは無いと信じたい。勉強が苦手だからといって自分自身の全てを否定する権利など誰にも無い。運動音痴だからといって何も出来ない訳では無い。価値観は人の数程ある。



不平等の図も様々な面がある中のわずか一つの側面を強調したに過ぎない。
 収入、成績、業績がその人の全てであるかのように扱うことが、格差を原因とする社会の分断を深刻化させてしまう。
 平面的なグラフに囚われるのではなく、複合的な立体世界を生きる。

「お金なんかで人間を評価しない」

(井手 2016: 96)

「人間の『違い』ではなく、『同じところ』に想いをはせてみませんか？」(井手 2016: 110)

↑違いを受容するのは表面上素晴らしいと思うが、それでは立場の異なる人々との共同社会での営みは実現しない。誰もが納得出来る、誰もが受益者になれる無理の無い制度が今後求められる。共通性こそ、立場の違う人々との交渉によって探し求めるものかもしれない。

三人のメンバーそれぞれの感想

この世の中には、少なくとも2種類の勉強が存在する。1つ目は、理想とする型がありそれを実現するための勉強である。これは、今やりたいことよりも未来にどう在りたいかに重点を置く。2つ目は、完成形を想定するよりも今の興味を起点として探ってゆく勉強である。

先生方もメンバーたちも忙しい中、貴重な時間を利用して行ってきたことは、それぞれの興味を軸とした勉強である。完成形に自らを埋め込むというよりも、勉強すること自体が目的であり充実させようとしてきたのだと思う。

先生方や学年やメジャーの異なる学生たちと意見を交換したり会話をしたり出来る機会は、学校生活に刺激を与えてくれた。感謝している。今後の展開も楽しみである。

(文学部 3年・関 まどか)

本カフェは、新型コロナウイルスの蔓延の影響で今年度はあまり活動ができなかった。しかし私独自でパットナムが提唱する3つの資本から格差是正するにはどうすれば良いのか考えた。

格差に関する多くの文献を読んだり、分からないところを専門の人に聞いたりして理解を深めることができたと思う。

またカフェの先輩方も社会や格差について興味を持っている人が多く、1年生である私も安心して取り組むことが出来た。活動人数4人という少ない人数ではあったが少ない人数であるからこそ、進行がスムーズに行うことができ、自分の意見を話すことができた。

来年度は、今年度以上に課外活動として県外に研修に行ったり、講師の方をお呼びして講演会を開催したりすることが出来たら良いと考えている。また私個人としても「常識や普通とは何か」

「それを押し付けていることがヘイトクライムに繋がるのではないか」ということをテーマに考えていきたいと考えている。

(文学部 1年・大野 亜里沙)

私なぜ「ポピュリズムとヘイトクライム」に所属したかという、マグノリア寮の知人の紹介で関心を持ったからである。私はもともと社会問題に興味があり、大学に入学した際に社会問題について場所を求めている。たいていの人は社会に何か疑問や自分の意見を持っていてもそれについて話し合う場がなく、意見を出す機会がない。一方でカフェに所属すると何か社会問題が浮上したり、社会に対して自分の意見を持ったりした際に発言しそれについて一緒になってグループ単位で考えていくことができる機会がある。また私は新たな価値観や考え方を発見し、それを取り入れることが出来るこの環境が普段の活動に活かしていると思う。今後も様々な社会問題について討論し、自分の考えや他の人の考えを尊重しながら活動していきたい。

(社会学部 1年・寺井 悠)

総括

以上のように、メンバーの感想と関心は三者三様である。それから、コロナ禍ということもあり、フィールドに出かけられなかったり、対面できなかったり、いずれのメンバーも多忙で集まることができなかったりと、さまざまな不都合が重なった。たしかに、ヘイトスピーチやヘイトクライム、ポピュリズムそのものについては、それほど掘り下げることはできなかつたろう。しかし、カフェとしてのテーマは、確かなものになったと自負している。また、それらを分析する際の枠組みは、自分たちのものになったと感じている。これから

も諸格差や社会の分断の問題を中心軸に据えながら、さまざまな社会問題を学習し、視野を広げ、可能ならば食を共にし、議論を交わしつづけたい。

(尾場瀬 一郎)

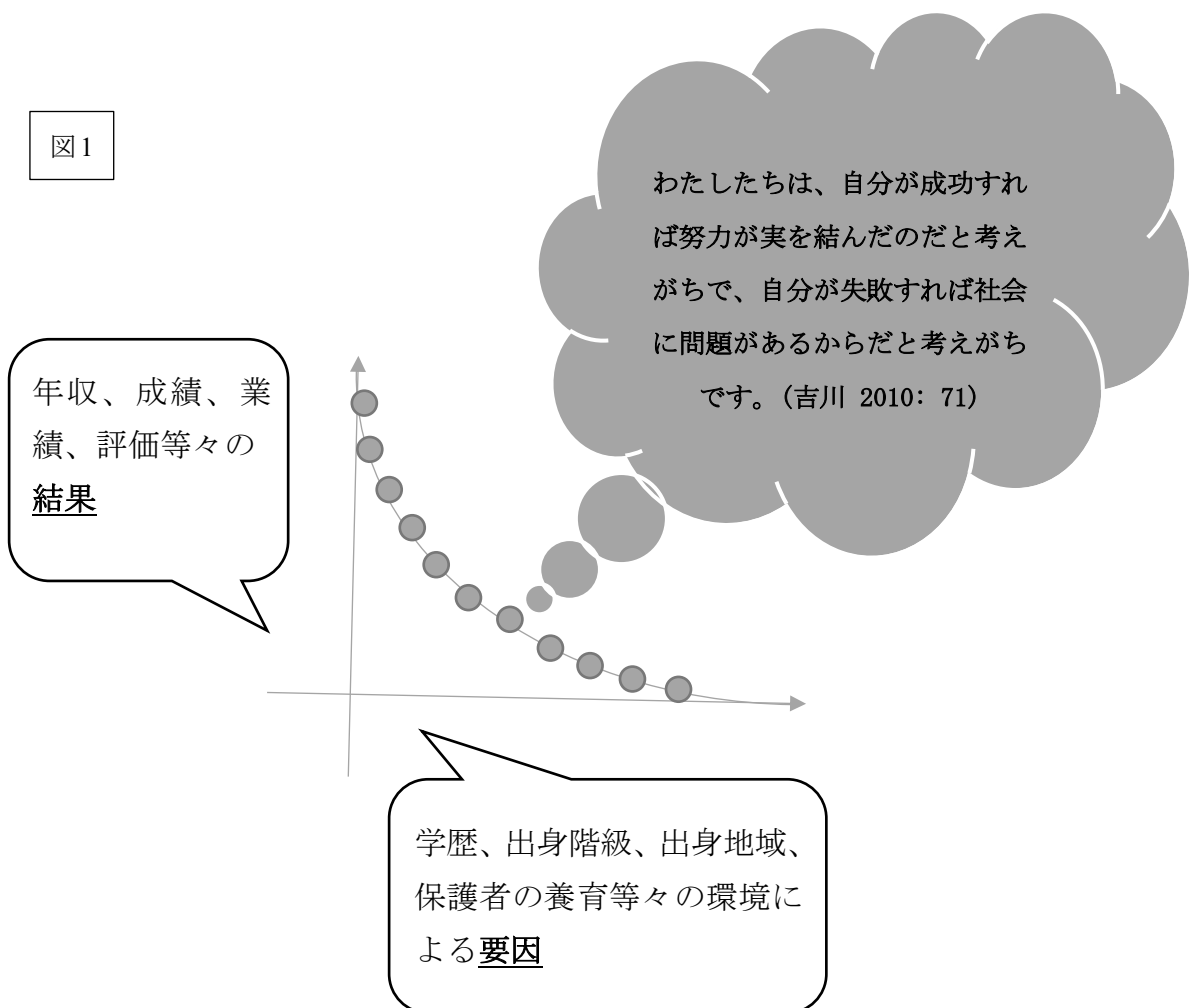


コロナ禍にも負けず！

参考文献

- ・ 井手英策, 2016, 『18歳からの格差論』 東洋経済新聞社.
- ・ 吉川徹, 2010, 『学歴分断社会』 筑摩書房.
- ・ 吉川徹, 2018, 『日本の分断』 光文社.
- ・ Bourdieu, Pierre, 1964, *Les Héritiers: Les étudiants et la culture* (石井洋二郎訳, 2007, 『遺産相続者たち』 藤原書店.)

図1



追録 マグノリア・カフェに関する規程〈一部抜粋〉

20 世紀後半から 21 世紀にかけて静かに、しかし確実に、私たちの社会は分水嶺を通過した。消費社会、ポストモダン、ノンモダン、後期近代、再帰的近代、リスク社会、リキッド・モダニティ、ポスト工業化、情報化、ニューエコノミー、ポスト資本主義、知識社会等、視点によってさまざまな切り口や多少の時期設定の違いはあるものの、近代化の象徴であった重工業と少品種大量生産を中心とする、20 世紀の産業社会がこれまでとは異質なものと変容したことは衆目の認めるところだろう。

社会がポスト産業社会へと変貌すると同時に、私たちはこれまでとはまったく異なった諸問題に直面することになった。そのため、これまで妥当性をもっていた学問の理論枠組みや概念装置では、新たに発生した問題を分析したり、解決したりすることができなくなった。つまり、従来の学問・科学は新たな問題に直面して、自らの限界に向きあわざるをえなくなったのだ。学問・科学には今日、根本的な自己変容が迫られている。

本学のリベラル・アーツ教育は、キリスト教主義を基盤に据えながら社会をより善いものに変革し、「自分と他者たちの希望と幸せ」を見いだすことのできる、見識ある人間の育成を目標としている。大学では、新たな形で展開されるべきアクチュアルな問いが発せられ、ラディカルな知的営為が機軸に据えられなくてはならない。

マグノリア・カフェは、課外活動として正規カリキュラムを補強しながら、現代社会に「問いを発見」して「適切な問い方」（問題構制＝パラダイム）を模索する時空を、本学キャンパスに実現しようとする試みである。また、この試みには、

西欧発の伝統的手法を採用する。食事を交えての知のコミュニケーション、すなわち会食仲間の形成だ。かつて、古代ギリシャでは、パーティで飲食をともにして知の対話がなされた。シンポジウム＝饗宴の場である。マグノリア・カフェは、四国学院大学版シンポジウムである。

目的

本学の課外活動としてマグノリア・カフェを全学的プログラムとして展開する。その目的は、次の通りである。

- 1) 現代社会を単に自明性のもとに捉えることを越えて、私たちの社会的現実に関々の問いを発見する。
- 2) 教員と学生による内発的動機による知的作業を促進する。
- 3) 学問をシンポジウム＝饗宴として行う機会、すなわち飲食の場を含む知的作業を通して、包括的かつ知的共同体構築の可能性を探る。
- 4) マグノリア学寮でのアカデミック活動の一環として、同学寮の理念である Living Learning Commune の構築に貢献する。

カフェ・カテゴリー

マグノリア・カフェは、以下の 3 カテゴリーで展開する。

- 1) A
 - i. テーマは、明確に近代社会あるいは現代社会への批判的視点を含む。
 - ii. 一人の専任教員あるいは特例教員 B が、本学正規学生（最低 5 名）と共に実施する。
 - iii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大

学祭で1回、そして、「マグノリア・カフェフォーラム」を、年度末に開催する。

2) B

- i. テーマは、実存的あるいは社会的問いを含む。
- ii. 一人以上の専任教員あるいは特例教員 B が、本学正規学生（最低3名）と共に実施する。
- iii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で1回、そして、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

3) 共同教育研究

- i. 同年度の二つ以上のマグノリア・カフェによる合同特別プログラム教育研究として実施する。
- ii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で1回、又は、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

表紙と裏表紙：

Plato's Symposium by Anselm Feuerbach, Public domain, via Wikimedia Commons
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Plato%27s_Symposium_-_Anselm_Feuerbach_-_Google_Cultural_Institute.jpg

ウィキメディア・コモンズの画像に加工を入れています。

マグノリア・カフェ 年間レポート「MARE」 第1集
Magnolia Cafe Annual Report Vol. 1

2022年3月発行

発行所 四国学院大学
〒765-0013
香川県善通寺市文京町3-2-1
TEL 0877-62-2111

編集 マグノリア・カフェ運営委員会
発行責任者 ネルソン橋本ジョシュア諒

印刷・製本 株式会社 弘栄社
〒766-0005
香川県仲多度郡琴平町苗田290
TEL 0877-75-0862



VOS ESTIS SAL TERRAE



SHIKOKU GAKUIN
UNIVERSITY

FOUNDED IN
1949

MARE vol. 1